現代の草墳葬

―― 韓国全羅南道莞島郡青山島の草墳葬を事例として ――

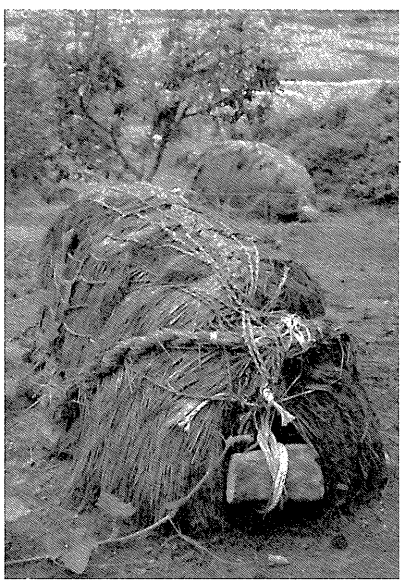
徳　丸　亞　木

現代の草墳葬
―― 韓国全羅南道莞島郡青山島の草墳葬を事例として ――

徳　丸　亞　木

目　次

はじめに
第１章　墓と風水師
第２章　生葬―草墳を伴わない葬礼―
　１．臨終から入棺まで
　２．発靷祭から治葬まで―2003年９月１日Ａ里Ａ氏の葬礼―
第３章　草墳葬
　１．草墳構築の理由
　２．草墳の形態と位置
　３．草墳の構築過程―2003年12月３日Ａ里Ｂ女史の葬礼―
　４．草墳の解体と移葬
第４章　改葬と草墳の解体・移葬―2006年９月２日，３日Ａ里Ｃ家の墓地改葬―
　１．Ｃ家の墓地改葬について
　２．墓地改葬と遺骨処理，草墳の解体・移葬の過程
第５章　現代の青山島葬墓制における草墳葬の位置
おわりに

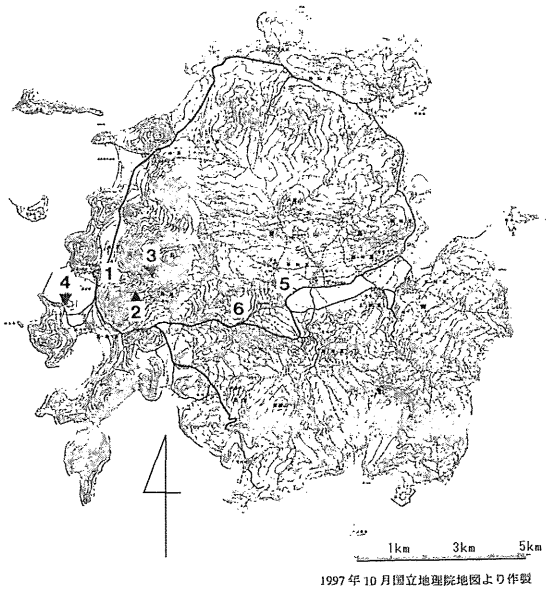


2005年に作られた草墳

はじめに

本論は，韓国全羅南道莞島郡青山面青山島における現代の葬・墓制―特に「草墳」と称される複葬と墓地改葬の観察記録に基づく基礎的な考察である[1]。

本論の調査地である青山島（青山面の内，最大の島）は，明治期から終戦まで日本人漁民が移住した事で知られる巨文島[2]にほど近い，総面積42.7平方km（畑3.8，田5.2，山林30.5平方km），海岸線85.6kmの島である。韓国の民俗学研究者には，同じ全羅南道の珍島と並んで草墳習俗が今日も残る島として知られている。青山島は1981年に多島海海上国立公園として指定された事からもうかがわれるように，全島が棚田や段々畑などの耕地と山林の緑に覆われた美しい景観を有している。同島は，1993年には映画「風の丘を越えて」の舞台ともなり，さらには「春のワルツ」のロケ地とされた事も記憶に新しい。2006年の調査時点では，ロケ地となった事を活用して，島の観光開発が急速に進められていた。青山島には支石墓の遺構があるが，現在の島の社会へと繋がる人々の居住は1608年に始まったとされる（『青山島』2001）。現在，戸数1412戸，人口3090名であり，行政的には23里に分かれている[3]。島の主要な産業は農業と漁業であり，特に島中央の標高340メートル程の大鳳山山麓のＢ里（地図１上５）から東方向に向けて大規模な扇状地性平野が形成され，農村が展開している。島の中心は，面事務所や警察署など行政機関が集中する島西部のＡ里（地図１上１）であり，そこに近接する青山島港から対岸本土の莞島面まで定期船で結ばれている。青山島港には，漁船が数多く停泊し，特にＡ里では漁撈に従事する者も多い。また，青山島港は，遠海出漁漁民の寄港地でもあり，太平洋戦争終戦前までは，「水平線が覆われる程」多くの日本漁船も島の近くで操業していたとＡ里の老人達は語る[4]。青山島港が外部の漁船の寄港地として栄えている事は，漁港の近くに「茶房」と呼ばれる喫茶室が数多く経営されている事にも表れている。



地図１　青山島の地形と調査地点
（原図　国立地理院地図）

島内の宗教施設としては，島中央の大鳳山中腹に仏教寺院として白蓮寺[5]があり，また，比較的戸数の多いＡ里やＢ里など８集落に，牧師がいるキリスト教教会がある。教会信者の中でも特に信仰心が厚い者がチプサ[6]となり，牧師と共に集落内の福祉活動や布教活動を行っている[7]。また，Ａ里には，風水師が現在も活動しており，特に葬礼や墳墓の構築に深く関与している。こ

の他，かつては5名のムダンが島で活動していたと伝えられるが，現在はおらず，近年まで，ムダンに変わって菩薩様（보살님）を自称する女性の「占い師」が鬼神の祭祀などを行っていたが，数年前に逝去された[8]。

草墳と草墳葬の概念について　青山島では，現在も草墳がみられる。草墳とは，西村美恵子によれば「朝鮮半島で行なわれてきた洗骨をともなう複葬の第一次葬として地上に造営される墳墓」であり，この草墳に伴う葬法全体を「草墳葬」と規定している（西村1985）。本稿においても，基本的にこの概念規定に従いたいが，青山島の草墳葬の場合は，現時点で既に破墓（草墳の解体）から治葬（埋葬）の過程に，遺骨に残った肉片などを遺族が削り落とし，並べ直す洗骨儀礼が行われない例が認められる。洗骨を行わず，そのまま土中に埋葬する事を，島では「安葬」と称すが，これも棺桶を開け遺体の状態を確認した上で蓋を開けたままで石灰を混ぜた土を掛け埋葬する方法と，棺桶を開けずにそのまま埋葬する方法とに分かれるとされ，実際に確認できた事例でも，その二通りの方法がみられた。この点では，西村の「草墳」および，「草墳葬」概念から外れる事になる。そこで，本論では，「死後，直ちに遺体を土中に埋葬するのではなく，藁で覆った棺を数年間地上に安置し，改めて明堂へと埋葬する複葬の一形態」を「草墳葬」，地上へ造営される一時的な墳墓を「草墳」と規定して報告を進める事とする。なお，この点については，草墳葬に，改葬あるいは二重葬に関わる「葬」としての性格と，葬礼の一段階である「殯」としての性格の重層をみいだす八木透の指摘（八木1995）がある。

西村の研究によれば，草墳習俗は，1968年から1977年の段階では，全羅南道など韓半島の南西部を中心に展開しており，その形態も多様なバリエーションに富んでいた事が知られる。また，依田千百子は草墳の分布と支石墓の分布とが，ある程度一致する事を指摘し，南方・北方の文化複合論的観点から草墳葬の位置づけを試みている（依田1980）。

青山島の草墳葬に関わるごく近年の研究報告としては，韓国西海岸，島嶼部の草墳葬について子孫の孝心や遺体が祖先が眠る土地を汚す穢土の観念との関連を論じた朴銓烈の研究（朴2001），および韓半島の草墳葬の現況を整理し，草墳葬における遺体の骨化と再生観念について論じた鄭鐘秀（鄭2003）の研究などがあげられる。

留意されるのは，草墳葬は，確かに複葬の一形態ではあるが，青山島，あるいは他の地域においても，全ての死者が草墳での一次葬を経た後，本埋葬される訳ではない点である。草墳を構築せずに遺体をそのまま土中に埋葬する事は「生葬」と称され，現在の青山島では，こちらが一般的な葬法となっている。例えば，日本の南西諸島において洗骨改葬習俗を伝えていた地域では，洗骨改葬は，異常死者の葬法など若干の例外はあっても基本的に全ての死者に適用される葬法であった。しかしながら現在の青山島で草墳葬を経て本埋葬される例は，むしろ少数であると言える。A里・B里を中心とした調査で，現認できた草墳は，年度途中で解体，あるいは新たに構築されたものを含めて8基であり，調査期間中に行われた5例の葬礼の内，草墳を構築したのは1

例であった[9]。すなわち，現代の青山島において，草墳葬は，生葬が行えない，あるいは行う事が適当でないとされた場合に選択される葬法であると言える[10]。

本論の主眼は，青山島における葬礼，草墳葬，改葬の現況についての報告にあるが，併せて，草墳葬を伴わない生葬と草墳葬とを，葬礼の過程において用いられる紙榜，魂帛箱子，銘旗，遺影など死者を表象する祭祀具の移動過程を整理する事で比較し，現代の青山島における草墳葬の位置づけを検討する。また，草墳葬における遺体処理のありかたを，墓地改葬時におけるそれと比較し，そこにみられる遺体に対する観念を検討する。

第１章　墓と風水師

墓地の位置と構造　青山島では，多くの墓地（明堂）が，集落の後背に広がる山の中腹に設けられており，平地や耕作地中に設けられている墓地は少ない。墓地周辺には木々がないので，遠くからでもその場所を視認する事ができる。墓地のほとんどは家単位で設けられており，原則的に各家の所有地に夫婦墓である二基の墳墓を並べて構築する形態，あるいは夫婦の合墳[11]の形態を採る。夫婦の一方がまだ生存している間は，墳墓は墓地区画の片側を空けて一基のみ設けられている。墓地の周囲には石垣等は設けられておらず，神道碑などが建てられている墓地も少ない。墳墓の大きさは約1.5㍍から２㍍程であり高さは1.2㍍程度である。石版で構成された四角い石室に木棺を納め，石版で蓋をした後，土を掛け，その上に円墳を構築する。墳墓の内部は土によって構築され周囲には芝が積まれ，頂部表面に貼り付けられている。墓の土質としては，麻沙土か黄土が良いとされる。

墓と風水師　死者を所有地の内，何処に埋葬するかは，風水師の指示に従う。青山島のＡ里に居を構えるＫ氏（彦陽公氏秋齋公派）は1920年に青山島で生まれた風水師である。Ｋ氏は，風水師として，墳墓や草墳の構築に深く関わり，葬礼においても，その手順や進行を指揮している。Ｋ氏は16才で学校を卒業した後は，船員となり，日本の神戸などへも訪れた経験を持つ。青山島には，かつて数名の風水師が活動しており，Ｋ氏もその一人から風水についての教示を受け，50才位から風水師を職業とするようになった。2005年の段階まで，青山島で風水師として活動していたのは，管見ではＫ氏のみであり，実質的に島内の全ての葬礼を司っていた。墳墓や草墳を設ける場の選定のみならず，葬日の決定や，墓地に棺桶を下棺させる時刻もＫ氏の判断に基づいている。Ｋ風水師は，地脈や水脈などの流れや地形，暦などを勘案して，死者を葬るに最も適した場所を選定する。場合によっては第一候補地が墓地として用いられない場合もあるため，その際には別の候補地を探す事になる[12]。

Ｋ風水師は，高齢となった事などを理由として2006年９月に行われたＣ家の改葬（本論第４章）では，風水師の役割を，Ｔ氏へと譲っている。Ｔ氏は，Ａ里の里長を勤めた経験も有する人物で

あり，集落内での人望もある。K風水師からの教示も受けているが，風水的知識の全てをそこから得ている訳ではなく，一般的な風水の解説書なども参考にしている。これまでの生活で風水師としての役割を勤めた事はないが，島での生活経験が長いため，島の葬礼には精通しており，C氏の墓地改葬も，その指示で比較的スムーズに進行した[13]。

共同墓地　B里には，これら個々の夫婦の墓地とは別に，共同墓地がある。この墓地はB里から青山港へと抜ける峠近くの道沿いにあるが（地図1上6の位置），芝で覆われた10㍍程の緩やかな傾斜地に100基を超える墳墓が密集している。何れの墳墓も古く，崩れているものもあり，近年の埋葬例は少ないように思われるが，この墓地は，自家の土地がなく墓地を作れない者や，子供の遺体を埋葬する際に使われる墓地とされる。かつては，子供を埋葬する際には，大人の治葬と異なり，盛大な葬儀は行わずに，遺体の頭側と足側の両方から瓶を被せて縄で縛り，親がそれを背負って共同墓地に運んで埋葬したと伝えられる[14]。子供が死亡した際の儀礼的な遺体損壊については確認できなかったが，その子供の兄弟は健康に生きられるように，遺体の頭が明堂の下方向を向くように通常とは逆さまに埋めるという[15]。

第2章　生葬―草墳を伴わない葬礼―

先に述べたごとく，青山島では，全ての死者が草墳の過程を経て葬られる事はない。本章では，2003年9月1日に行われたA里，A氏の葬礼を例として，草墳の構築を伴わぬ葬礼と埋葬について解説を行う。なお，この葬礼を観察できたのは出棺が行われる当日の早朝から埋葬までのため，臨終から入棺までについては，『青山島』（全南莞島郡青山面郷土史発刊委員会編　2001）における葬礼過程の記述と，聞き書きに基づき解説する。

1．臨終から入棺まで

招魂　臨終を迎えんとする者の息が絶えると，風水師か家族が死者が普段着ていた服を持って屋根に登り，北を向いて死者の住所と名前を呼んだ後，「復，復，復」と叫んで身体から出た魂を呼び戻す招魂を行う。現在では，招魂を行う例は少ないという。

臨終から発喪　死を迎えると遺体の目や口を閉じ，髪を整える。手と足を少し開いた状態にし，清潔な白紙か綿で，目，耳，鼻，肛門など身体の穴をふさぐ。一重の掛け布団で身体を覆い，七星板（屍板）の上に運び，屏風で周囲を塞ぎ，その前に死者の遺影を置いて蝋燭に火を付けて，香を焚く。遺体を安置した部屋を護喪所とする。収屍を終わると遺族は質素な衣類に着替える。遺族は死者に対して哀悼するが，大声で嘆き悲しむ行為は慎む。また，素足になる事や，髪を長くほどく事などは禁じられる（『青山島』2001）。家の門前には，忌中を示す花飾りや提灯を下げる。

喪制と喪主　原則的に死者の配偶者と，直系親族が喪制（忌中）に入り服人（喪に服する人）となるとされるが，筆者が観察したA氏の葬礼では，死者の娘の夫も喪服を纏い葬列に加わっていた。親が死亡した場合は，喪主（主喪）は原則的に長男であり，長男が死亡している場合などは，その長男（長孫）がその役割を務める場合もある。長男や長孫がいない場合にのみ次男か，その長男が喪主となる。妻が死んだ時には夫が喪主になる。『青山島』の記述によれば，死者の子孫が全くいない場合には，喪主ではないが死者に最も親しかった者が葬礼を主幹する場合もあるとされる。

護喪　喪主以外に，葬礼全体を進行させて行く役割を持つ護喪が選ばれる。死者の遺族で親等の遠い者や，知人の中で喪礼に詳しく，その経験がある者を護喪とし，葬礼の案内や連絡，弔問客録の作成，埋葬許可の申請，死亡申告などを喪主に代わって代行し，葬礼全体の進行も司る（『青山島』2001）。筆者が観察できた葬礼においても，護喪はK風水師に相談し，葬日と葬地を決め，それを集落の者達や，死者の関係者に通知などを行っている。

湯灌と入棺　死後１日が過ぎた段階で，遺族の女性が湯と布を用意し，遺体を綺麗に拭き（沐浴），白い衣を着せ屍衣とする（襲）。これに用いた湯と布は土を掘って埋め，もし死者が病気であった場合は臨終時の着衣は燃やして処分する（『青山島』2001）。聞き書きでは，遺体には韓服を着せるのが正式であるが，平素来ていた服の内，新しいものに着替えさせ屍衣とする事が多いという。棺桶は寝棺であるが，遺体を入れる際には棺の側板と遺体の間に白紙や麻布，あるいはロールペーパーなどを詰め死体が棺の中で動かぬようにしている。その後，棺の蓋を乗せ壮紙と柩衣を被せ安置する。

喪服　喪服に着替えるのは，入棺が終わってからとされ，この段階からは成服とされる。男性の喪服は，上下とも黄の麻布で作られ，足下も脚絆を付けている。『青山島』の記述では，女性は白いチョゴリに白いチマを着るとされるが，現在は男性と同じ黄の麻布で作った喪服である。男性遺族は白の喪服を着る事はないと『青山島』には記載されているが，次に解説するA氏の葬礼では，死者の姻族にあたる娘の夫が白の喪服を纏っていた。また，男女とも藁の紐を厚く作って帯として締める。男は麻布で作られた頭巾を被り，女性は麻布のタオルや黄いタオルを被り，その上から藁の鉢巻きをする。男性は手に竹の木で作った杖を持ち，女性は梧桐（オドン，오동）の杖を持つ。K風水師の説明では男性の竹杖は天と陽を象徴し，女性の梧桐の杖は地と陰を象徴するとされる。また，竹杖は六つの節がある「五間六節」の物でなくてはならないとされる。足には藁で編んだ大きな藁靴を履くとされるが，現在では黒の靴下に黒の皮靴を履き，女性は白の靴下の上にゴム製の白い靴を履いている。喪服は，脱喪まで着るとされるが，A氏の葬礼では，埋葬が終わり墳墓の前のチェサが終わった段階で，K風水師が指示を出して頭の頭巾とタオル，脚絆のみを残して喪服を脱がせ，その場で焼かせた。

霊座　棺前に屏風を立て掛けその前に霊座を用意し死者の遺影を置き蝋燭に火を付け香を焚

く。また，銘旗（銘旌，ミョンジョ，명정）を作って霊座の東側に立て，霊座の前にハクチャ（台）を置き，杯とリンゴを揃え，生前の愛用品などを供え，朝と夜に香を焚く。銘旗は，全服，長さ2㍍の赤絹に白い色で，死者の肩書き，本貫，名前を記す。銘旗に名前などを記す際には上下の先端に竹を入れ，出喪の際には長い竹の竿に垂らして喪輿の先頭を持ち歩く。

紙榜と魂帛箱子　青山島の葬礼において，遺体の他に死者の表象として用いられる祭祀具は，先に解説した銘旗と紙榜（写真2-1），魂帛箱子（写真2-2，話者によっては「魂魄函」と称する），遺影である。この内，紙榜は，風呂に入り身を清めたK風水師が長さ22㌢，幅6㌢に白紙を折り上部二個所を内側に折り込み，さらに上下左右計四個所に霊魂が通るための小さな穴を開け，官職（ない場合は「学生」）姓名を用いて作る。実際に用いられている紙榜には姓名が記されていないものもある。また，遺影を用いて紙榜を作らない葬礼も多いという。魂帛は，全幅の麻布1尺3寸を1寸5分宛八重に折り，三重余らせたものを巻き，五色の糸を付けて，前で結んで取っ手と成したチョンスゥンケビ（청승개비）を紙箱に納めるとされるが，屍衣である韓服の襟など死者の衣服の一部を紙箱に収めて魂帛箱子とする場合もある。先にも招魂儀礼について述べたが，K風水師によれば，臨終間もない時には，遺体を離れた魂が屋根の上で彷徨っているので，屋根に登って，死者の衣服を振り回して，その魂を捕らえ喪家に連れ戻すが，その際，屋根の上で使った服の一部を魂帛として用いるという。この魂帛箱子は本来，三年喪の期間，喪房で祀り，大祥が終わった段階で墳墓に埋めるものとされる。現在では二年喪で済ませる事が多いとされ，報告者が観察した葬礼では墳墓を構築する際に，その頂部に供物の一部と共に埋められる例がみられた。

写真2-1　紙榜

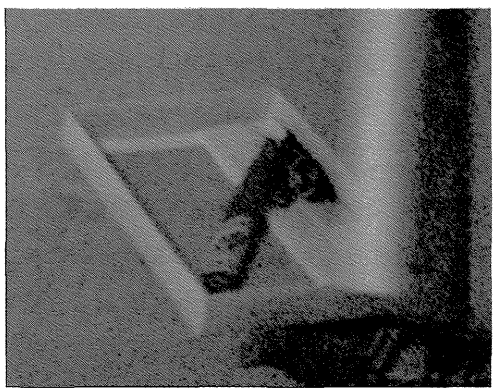


写真2-2　魂帛箱子に納められた品物

葬日と墓地　青山島では，出棺から治葬を行う葬日は，死亡した日から3日目か5日目とされており，これを「三日喪」あるいは「五日喪」と呼ぶ。また，葬日には偶数日やこの日に葬礼を行うと喪が重なるとされる重喪日を避けて奇数日を選ぶ。青山島には，一人の葬礼を出すと，必ずもう一人死者が出るとする伝承があるが，調査期間中も2回に渡り，2名の葬礼が重なった。葬地は，K風水師に依頼し先山（祖先の眠る山）や，所有地の中でも風水的に良い土地を墓地とする。

2．発靷祭から治葬まで―2003年９月１日Ａ里Ａ氏の葬礼―

続いて，喪家からの出棺から治葬までを解説するが，ここでは先に述べた如くＡ里Ａ氏の葬礼調査資料を基に報告する。Ａ氏は72才で死亡したが，息子２名，娘４名がおり，長男が喪主を務めた。Ａ氏の死亡時の居所はＡ里であるが，以前はＣ里に住んでおり，その関係からＫ風水師はＡ氏の墓地として，Ｃ里近くの丘を選んだ。

喪輿の構造　青山島の葬礼に用いられる棺を運ぶ喪輿をサンヨ（상여）と称する。このサンヨは棺を安置させる骨組みの部分（写真2-3）と，棺の上に被せる非常に派手やかな飾りの部分（写真2-4）からなる。骨組みの部分は長さ６㍍，幅1.7㍍程で，２本の直径15㌢程の丸太に直交する形に直径５㌢程の横木を４本下側から縛り付け，各丸太の先端下部に太さ８㌢ほどの麻縄（デチェ，대채）を引き回して縛り，さらに中側２本の横木にＹ字型に捩り合わせた麻縄を縛り付け，組み合わせた丸太がぐらつかぬように安定させてある。棺の担ぎ手は，前後各１名は縦の丸太の間に肩を入れて運ぶが，左右各４名付く担ぎ手は，丸太の間を結ぶ麻縄を肩に乗せて運ぶ事になる。また，前部の横木と２番目の横木の間，３番目の横木の近くにＸ字型に交差させた竿を立て，その先端部と丸太の先端部にも麻縄を張って竿を安定させてある。棺を乗せる位置にあたる中２本の横木には，10㌢程に丸めた藁束が２束置かれている。喪輿の飾りの部分は20年程前までは集落で作っていたが，現在は島対岸の莞島の業者から完成されたものを購入している。上部は緑・赤・白・紅・紫・黄などの紙飾りが付けられ，前部には龍の図柄，後部には虎の図柄，四隅と側面中央には孔雀（あるいは鳳凰か）の図柄が配され，その間も緑・黄・赤や紅の紙飾りで覆われ，さらに銀色の切り紙細工が下げられている。基部は花模様の図柄や青・白・黄・紫・赤の紙飾りで覆われている。また基部の四隅と側面中央には天女と思われる女性像が飾られている。この６体の女性像は各々異なる形を採っている。棺を喪輿に乗せ，飾りを被せた後，棺の四隅の竿の先から死者を哀悼する意味の漢詩を記した赤・黄・青・緑などの絹の旗と，長さ１㍍程の切り紙が吊される。

写真2-3　喪輿の骨組み

写真2-4　喪輿の飾り

太鼓　葬礼で用いられる太鼓は直径40㌢ほどの小型の臼太鼓様のもので，撥は30㌢程の生木の

枝の皮を半分程削り，削り残した部分の先に赤布を付け，削った部分で皮を叩く。

葬日の喪家　葬日の喪家の門前には菊の花飾りが飾られ，「謹吊」の文字と青山島のマークが記された黄色の提灯が下げられている。A氏の娘達の夫もこの葬礼に参加しているが，彼らは黄色の頭巾に足まで続く白の喪服を纏っており，黄色の喪服を纏っている死者の男性遺族とは服装上も区別されている。

霊座と遺影・紙榜　棺が安置された部屋では，棺の前に屏風を置き，その前に霊座を設置している。朱塗りの霊座には，金属製のボウルに精白した生米を一杯に満たし，そこに遺影を立てたものと，紙榜を納めた木製位牌が祀られ，遺影の横には蝋燭が1本灯されている。K風水師によれば，紙榜は本来埋葬の時に墓地で書かれたものであるが，近年は，家で書いて葬列と共に運ばれるという。青山島で観察できた他の葬礼では，遺影はそのまま立て掛けられるか，籠に入れて立てられるかしていたが，この葬礼では，白米の中に立てられていた点が注意された（写真2-5）。なお，魂帛箱子は，この時点では竹籠の中に白布を掛けて入れられ，霊座の左側の床に置かれている。遺影・紙榜の前には，一組の箸が乗せられた高杯様の祭器と水が満たされた小椀が置かれ，林檎と梨，豚肉が供えられている。霊座の手前には線香立てと酒，水を入れた急須が置かれ，左右には菊の花飾りなどが置かれている。

写真2-5　白米の中の遺影

庭の様子　庭では女性遺族が弔問客や喪輿を担ぐ男性達（喪徒軍）に食事を振る舞っている。軒先には，雲の文字を印した紙を挟んだ銘旗が立て掛けられている。銘旗には，「学生慶州□公之柩」（□は伏せ字とした部分。以下同様）と印され，下部には表に「雲」，裏に「亞」の文字が印された紙が挟まれている。「雲」は天を，「亞」は墓地を示す。また，謹吊と印された中順天青年会議所の旗や，弔問客からの餞別を納める箱と記帳も置かれている。

写真2-6　出棺前のチェサ

出棺前のチェサ（発靷祭）　午前10時半に出棺が始まる。棺の前から霊座や屏風，花飾りなどが除かれる。出棺に際しては，霊座に対してまず2名の息子によって拝礼が行われ（写真2-6）続いて娘達により拝礼が行われる。遺影と紙榜，魂帛箱子は竹籠（霊輿）に入れられひとまず床に置かれ，霊座や屏風が除かれる。この時点から，今まで静かにしていた娘達は大声で嘆き始め

る。その後，死者の長男の孫娘[16]が首から紙榜・魂帛箱子・遺影を納めた竹籠を提げる[17]。棺には，棺を担ぐ男達が白綱を巻き付けて行く。棺の横に7本巻き付け，側面に1回巻き付ける（写真2-7）。この綱をホンベクチョル（魂魄綱，혼백줄）と呼ぶ。綱を巻き終わると，棺の上に白地に金色で一対の鳳凰が描かれた柩衣を掛け，棺の上の前後に藁束を乗せる。娘達は棺に抱き付き大声で嘆き泣き続ける（痛哭）。娘達の叫びには，「可哀想なお父さん，どうぞ私も一緒に連れて行って下さい」「今，あの世に旅立って何時戻って来てくれるのか」など共通した言い回しを認める事ができる。

写真2-7　魂魄綱を結ぶ

出棺と運輿　やがて，先導者（先唱軍）によって太鼓が叩かれ，出棺が始まる。棺を担ぐ男達は前後に1名宛，左右に2名宛の計6名である。棺を縛った綱に結ばれた縄を引いて膝よりやや上の高さまで持ち上げ，部屋から運び出す。部屋から庭へと出る上がり口の敷居には半分に割った瓢箪の代用としてプラスチック製のボウル[18]が伏せて置かれており，これに数度，棺を落として割って戸外に出る（写真2-8）。瓢箪を棺で割る行為については，家にある全ての災いを共に持ち出して貰うためとする説明や，速やかに霊魂が出て行くように，この家にもう死者が食べる物はない事を示すためとする説明が聞かれた。庭に出た棺桶を，棺担ぎの男達は3回時計回りに回す。これは，死者の霊魂が，この家に戻らぬようにするためとの説明が聞かれた。棺は門から路地へ出され，銘旗を掲げた長男の息子，遺影・位牌・魂帛箱子を納めた竹籠を首から下げた長男の長女，棺を下げた男達，男性遺族，女性遺族の順に歩いて行く。集落の路地を出て，喪輿の置かれた道路脇まで出ると，担ぎ手達は，棺桶を喪輿に乗せる。この時には，頭が喪輿の前側に来るように棺を置いている。棺を喪輿に乗せると，一度，棺衣を外して，棺を露わにする。すると，死者の娘達が皆，棺に縋り付き，嘆き続け死者との別れを惜しんだ（写真2-9）。15分程その状態が続いたが，やがて喪輿を担ぐ男達が嘆く娘達に構わず棺衣を再び棺

写真2-8　ボウルを割る

写真2-9　女性達の涕泣

に掛け，二束の藁束を乗せて，棺飾りで覆った。道路脇には，集落の者達が集まり，彼らには，食べ物（餅，玉子，菓子，飲料水，魚の干物が入った弁当箱）と酒やジュースが振る舞われている。太鼓が叩かれ，葬列が担がれる。葬列は，担ぎ手の男達の「カンノボーサ」の掛け声と，喪輿に取り付けられたスピーカーからの歌にあわせて，路地を進んだのと同じ順番で，港に向けてゆっくりと進んで行く。この葬歌は，かつては担ぎ手達がもの悲しく唄ったものであるという。少し進んだ所で，棺の担ぎ手達は，死者の娘の夫の一人を喪輿の前部に登らせ，ゆっくりと喪輿を揺する。娘の夫は，暫く喪輿の前部に立った後，１万ウォン札を前部の紙飾りに結び付けて喪輿から降りる（写真2-10）。

写真2-10　喪輿遊び

水路を越える際の「遊び」　その後，葬列はまた進むが，道路の下に用水路が流れている場所まで来ると，男達は再び喪輿を道路脇に降ろしてしまう。道路には７個の石が並べられ，男達は，死者の遺族や娘の夫達に，金を出すように要求する。遺族や夫達は，石の下に紙幣を挟む。男達は「金額が少ない，もっと出さないとこんな暑い日に棺は担げない」などと笑いながら，７個の石全ての下に紙幣を挟むように要求する（写真2-11）。これは，一種の「遊び」であるとされ，寿命を全うしての自然死は悲しい事ではないので，こうした「遊び」も許されるという。反対に若くして死亡した者や，事故や災害などによる急な死者の葬礼では，このような「遊び」は行えないとされる。また，Ｋ風水師が指定した時刻に，墓地に下棺させるための時間調整の意味もあるという。途中，何処で何回休むかは，棺を担ぐ男達の判断に任されているというが，観察できた葬礼では，大抵，道路下に水路がある場所や，水路に掛けられた橋の手前，墓地に至る辻などの境界性を示す場所でこの行為を行っていた。この点からは，死者の霊魂を段階的に境界を越えさせ，送って行く意識があるように思われる。死者の遺族の生活状態が苦しい場合などは，回数を減らして，金の要求もしつこく行わないという。この後，葬列は再び港へと向かう。

写真2-11　石に挟まれた紙幣を拾う

港での下直　葬列が港に着くと喪輿を降ろし，その横に太鼓を置いて，その上に位牌・遺影・魂帛箱子の入れられた竹籠を安置し，男性遺族と娘の夫達，娘達の順に拝礼を行う。これは死者がこの世に暇を告げるためのもので，下直（ハチク，하직）と称される。拝礼する方向の先には，港を挟んでこれから埋葬する祖先の墓地が位置している。

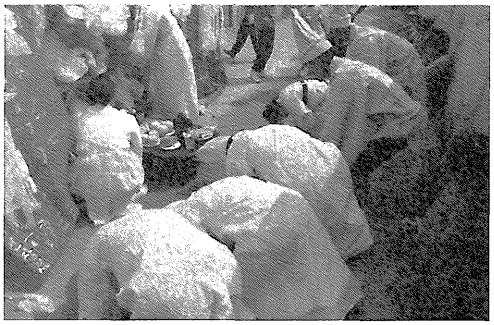


写真2-12　次女の家の前での下直

次女の家の前での下直　葬列は港から再び進み，今一度，集落の路地へと入って行く。辻を曲がると死者の次女が嫁いだ家があり，この門前に喪輿を降ろし，その横に太鼓を土台に位牌等の納められた竹籠を安置し，前には梨と林檎３個宛，葡萄，豚肉，焼魚，酒を供えて，門側から遺体に向かって男性，女性の順で拝礼を行う（写真2-12）。供物は，この家で用意したもので，次女の夫は船乗りで，死者の生前，彼から経済的に援助を受け，死者は常にそれに感謝していたので，この家に立ち寄ったのだという。担ぎ手の一人は，これも一種の「遊び」で，死者が生前，一番親しんでいた人の家などに立ち寄り，挨拶をさせているのだと解説した[19]。担ぎ手達は，チェサの間，路地に腰を下ろし，サザエの塩茹を肴に談笑しながら酒を飲む。チェサが終わり出発すると，路地の下を流れる用水路の手前に既に石が並べられており，喪輿が降ろされ，担ぎ手から金が遺族に要求された。また，ここでも娘の夫の２人を喪輿の前部に乗せ，彼らは紙飾りに紙幣を結び付けた。

海沿いでの下直　葬列は集落を出て，再び港沿いに墓地への道を進んで行くが，その途中で，喪輿を降ろし，竹籠を喪輿の横に置きチェサを行う。このチェサでは，遺族は，棺を挟んで港の出口の海に向かって拝礼する事になる。このような場所でのチェサは，死者を集落の幾つかの場所へと回らせて別れの挨拶をさせる意味があるとの説明が聞かれた。この場所で暫く休憩した後，葬列は再び海沿いの道を進んで行く（写真2-13）。約１km程進むと三叉の辻に突き当たるが，棺を担ぐ男達は，ここでも棺を降ろして，辻に石を置き，遺族に紙幣を要求する。ここでは，一万ウォン札１枚のみで出立した。これはK風水師が指示した時間に，墓に下棺するためであるとの事であった。

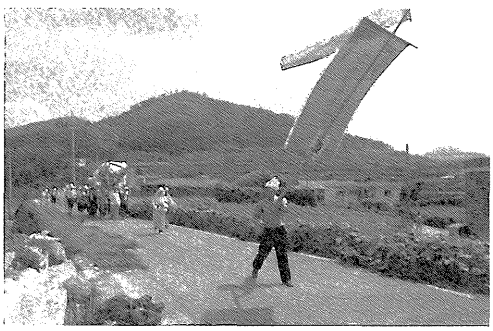


写真2-13　海沿いを進む葬列

下棺　A家の墓地は，集落から湾を挟んだ対岸の丘の背後に位置する（地図１上４の位置）。葬列は，太鼓に合わせて全員で葬歌を歌いながら丘を登り，墓地へと入って行く（写真2-14）。墓地には，先に死亡している妻の墳墓の左隣に，山役（墓穴を掘る役目の者達）の男達により墓穴が掘られ，大理石の板で石室が設けられている。死者の娘の夫の一人が墓穴に入って，石などを取り除く。墓穴の周囲には，既に墳墓を構築する範囲に丸く芝が置かれている。墓穴を掘る際にはK風水師が，地面に杭を打ち，そこから水糸を張って，厳密に墓穴の方位を風水盤で計って行う。棺の担ぎ手達は，喪輿を地面に下棺（ハクゥアン，하관）するが，これを停喪方（チョンサンバン，정상방）と称し，喪輿を降ろすにもK風水師が指示した時刻・方位に合わせなくてはならない。喪輿を降ろすと，直ちに飾りを外し，棺に棺衣を掛け，藁束を前後に一束宛乗せる。太鼓に合わせて綱を引き上げて喪輿から棺を運び出す。

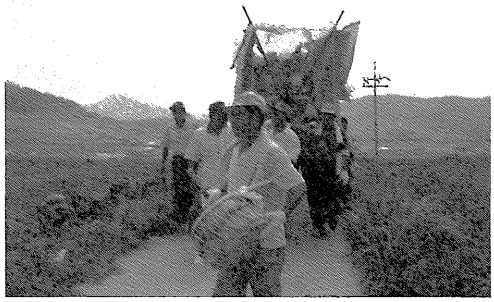


写真2-14　墓に入る葬列

呼冲　棺を墓穴に入れる際に，その現場をみると憂患が生じてしまう年齢の者がいる場合は，終わるまで別の場所に移って貰う。K風水師によれば，この呼冲（ホツゥン，호충）の対象となる年齢は，喪主の年齢と，その日の日柄で決まるという[20]。

棺の置き方　墓穴には，前後に木の棒とスコップが置かれ，ひとまずその上に棺が置かれる。藁束が除かれ棺衣が外され地面にそのまま丸めて置かれる。棺は遺体の頭頂が丘の高位面（東）方向に向くように置かれている。棺を結んでいた七本の綱と側面の綱が次々と切られて解かれて行く。綱を除くと，飾りの付いた二本の布を棺の下，前後に通し，それで棺を一度引き揚げ，木の棒とスコップを除いて，静かに棺を墓穴へ降ろす。ここでK風水師が水糸と風水盤を用いて，棺が正確に彼が指定した方位に向けられているかどうかを確認する分金を行う。棺がややずれて置かれていたため，K風水師の指示で石版と棺の間にスコップを差し込んで棺をわずかに動かして調整する。棺と石版の間の左右に，裏表に「雲」と「亞」の文字が印された紙を差し込む。五枚の石版を，墓穴に一枚宛被せて覆って行く。娘の一人が，死者との別れを惜しんで，棺に触れて嘆き続ける。

草墳構築の開始と取土方　棺に五枚の石版を全て被せると，その上から葬列の先頭に掲げられて来た赤い銘旗を丁寧に掛ける。棺を納めた石室からずれぬよう，K風水師は気を付ける。続いて，酒を一本分，銘旗の上から掛けて行く。長男，次男，長女，次女，三女，四女の順にスコップで土を一杯宛掛ける（写真2-15）。娘達が土を掛ける間，その夫達も見守っている。遺族が棺に掛ける土に，墓穴を掘った際のものを用いると喪主に憂患が生じる故，K風水師が指示する別の場所の土を用いる。これを取土方（ツゥィトプバン，취토방）と称する。息子と娘達が各々土を掛け終わると，重機で大量の土を掛け，墳墓の構築を始める。ある程度土を持った後，棺を担いでいた男達が周囲に芝を重ねて，土が崩れぬように形作って行く。

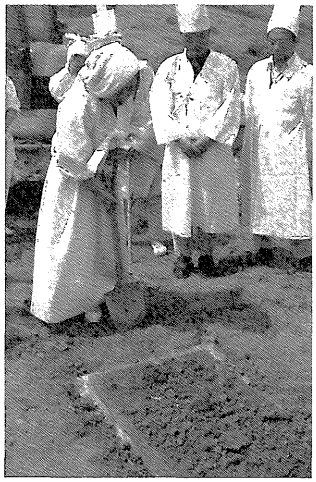


写真2-15　取土方

作業の中断　しかし，ある程度作業が進むと，重機を動かしていた若者が，ショベルを墳墓の上に乗せたまま重機を動かすのを放棄して，運転席から離れてしまう。また，男達も作業を止めてしまい，遺族に金を出すよう要求を始める。遺族達は今回は金を出さず，早く作業を進めるようにいうが，男達は，笑って作業を中断したままとなる。やがて，集落の長老の一人が，重機を動かしていた若者に近づき，彼を説得して再び作業が再開される。また，K風水師の指示で，墳墓の前の土が掘り返され，水はけが良いようにされた。

平土祭　墳墓の構築が終わった段階で，チェサを行う。成墳祭にあたると思われるが，これをK風水師は平土祭（ビョンド，평토）[21]としている。この時点まで，遺影・紙榜・魂帛箱子は竹籠に入れられた状態で，孫娘が保持している竹籠からそれらを取り出し，墳墓の前に遺影を中にして，右側に魂帛箱子，左側に紙榜を置き，さらにその前に台を据え白紙を敷いてK風水師が供物を並べて行く。K風水師が供物を並べる際には，生米を持った椀に立てた線香の上に供物をかざしてゆっくりと廻し，置いて行く。遺影の前に箸を添えた祭器を置き，その右側に一本の太い蝋燭と餅，左側に毛を毟った鶏と豚の頭を供え，中程には御飯と湯，酒の器を中心に，右側に焼いた魚の干物を供える。手前には右側から林檎3個，祭器と酒の器，モヤシの水煮，葡萄，梨3個を供える。男性，女性の順に拝礼し（写真2-16），その後，女性達が生者に対するのとは反対に左手を用いて酒を捧げる。K風水師は祝文を読み上げる。チェサが終わると太鼓を叩いていた男性が，K風水師の指示で紙榜などを運んでいた竹籠に供物

写真2-16　平土祭

の一部を箸で摘んで納めて行く。K風水師は魂帛箱子を持ち，墳墓に登り，頂部に浅い穴を掘って，その中に魂帛箱子と葡萄，モヤシの水煮などの供物を入れ，土を掛け芝を乗せ（写真2-17），平土祭を終わる。

写真2-17　魂帛箱子を埋める

脱服　ここで，K風水師は遺族に指示して，頭の頭巾やタオル，脚絆を除いて喪服を脱がせ，一ヵ所に集める。正式には，死後百日目に行われる百日祭まで喪服を着用しなくてはならないが，数日の内に島を離れる遺族もいるため，K風水師は，この時点で脱服（タルブク，탈복）の形を採らせた。頭巾やタオル，脚絆は今日一日の間は着用しているように指示された。

山神祝文　この後，K風水師は段ボールの箱に供物の一部を収め，それを新しく作られた墳墓から左側に数メートル離れた土地に置き，山神と土地之神に対する祝文（サンシンチュク，산신축）を読み上げる。K風水師によれば，この祝文は山神と土地之神に，遺族がその両親をこの土地に埋めた事の許しを得るためのものとされる。

紙榜　紙榜には「顕考學生府君　神位　□哀子今복奉祀」と墨書されている。

喪服，祭祀具の処分　埋葬が終わり，脱ぎ捨てられた喪服や花飾りなど不要となった祭祀具は，墓地の隅で焼いて処分される。また，祝文にも火が着けられて焼き捨てられる。

写真2-18　明堂での飲福

飲福と遺影，紙榜の家への帰還　完成した墳墓には，雨で土が崩れぬようシートが掛けられる。死者に供えた供物を遺族は飲福（음복）（写真2-18）する。この共食は，男女の別や年齢などの序列に関係なく，祭祀に参加した遺族が全員参加する。この時点では，既に嘆く者はおらず，娘達も皆，談笑し，落ち着いた顔をしている。共食が終わると，遺影と紙榜が再び竹籠に入れられ晒が巻かれ，孫娘がそれを首に掛けて，遺族一同と家へと戻り，喪房に霊座を設けて安置する（写真2-19）。初終を終え，四十九日目の四十九祭，百日目の百日祭，一年目の小祥（小喪）を経て大祥（大喪）まで二年間の服喪となるが，現在では1年で済ませる事もあるという。K風水師の説明では，1年

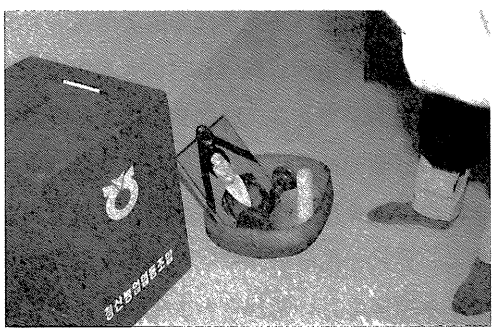


写真2-19　家に戻された遺影、紙榜

目の小祥，２年目の大祥を経て，それから百日経った丁日に喪房での祭祀から祠堂での祭祀に移すのが正式な方法であるという。

第３章　草墳葬

１．草墳構築の理由

続いて，草墳葬が行われる葬礼について解説を加える。先に，現代の青山島においては，草墳葬は，生葬が行えない，あるいは行う事が適当でないとされた場合に選択される葬法と述べたが，草墳葬を行う理由はどのように説明されるのであろうか。青山島では以下の例が聞かれた。

1)．青山島は，親に対する孝養が篤い土地柄であるので，親が死んでも直ちに埋葬せず草墳を作る。
2)．青山島では，男性が遠洋に漁に出ている家が昔は多かったが，その男性が治葬に戻れるように，遺体を草墳に安置する。
3)．死者の遺体は，やがて腐敗して，そのまま埋葬すると祖先が埋葬されている土地（先山）を汚し，子孫の家運を衰えさせるので，草墳にして遺体を綺麗にした後に埋葬する。
4)．事前に島の占い師に占って貰い，草墳を作らねば家運が衰えるか否かを確認して，衰えると占われた場合は草墳を作る。
5)．陰暦１月中は，土地を掘り返す事ができないので，その期間に死者が出ると，草墳にして，埋葬を待つ。この期間に土地を弄ると山神と土地の神が怒り麻疹が流行する。対して陰暦の閏７月が，改葬や草墳の解体・移葬に適した月とされる。
6)．陰暦２月には，ヨンドンハルモニが訪れるため土地を弄れないので草墳を作る（Ｂ里の占い師による）。
7)．伝染病死者は草墳葬とする。そのまま埋葬すると再び別の者が病死する。

以上の内，１）と２）は，生者の死者に対する孝養を理由としたものであり，李光奎による草墳構築の理由の四分類（李1969）に従えば，１）は「孝誠的原因」，２）は「再見的原因」に位置づける事ができる。特に２）は，島嶼である青山島の生業形態とも関わる理由である。

李の分類では「風水的原因」に位置づけられる３）は，遺体から発生する穢れが，祖先が埋葬された土地を汚してしまう事が大きな理由とされており，それに関わる家運の盛衰が問題ともされる。先祖の眠る明堂に生葬すると遺体から水が出て，これが土地を汚し，子孫に災いを招くので，草墳葬を行い遺体から水を抜くとする話者もいる。この場合，先山でない場所に遺体を埋葬するのであれば草墳葬は必要ないとする。朴のいう穢土の観念との関連が窺われる（朴2001）。

4）も草墳の構築と家運の盛衰が問題とされる例であるが，具体的には以下の例が確認された。「青山島では，夫婦単位で墳墓を並べて埋葬するが，ある家では，現当主の父が先に死亡して，草墳を作らず山の墓地に埋葬された。後に母も死亡したので，その遺体を父の墳墓の横に埋葬するつもりで一晩置いておいた所，当主の夢に父が現れ，死んだばかりの遺体を埋めると腐って土地を汚すから来るなと告げられた。そこで，急遽，占い師にクッを行って貰い，草墳を作って，母親の遺体を納めた。」この事例は，占い師が草墳葬に関与した事例であるが，夫婦の墳墓を並べて構築する墓地形態が一般的でありながらも，男性優位の観念，および，新たな死者の以外により土地が穢されるとする強い観念が示されている。

占い師は，依頼があれば草墳葬でのクッにも関与していた。占い師によれば，遺骨の色は白が良く，黄色が最も良いとし，草墳葬を行うと遺骨は，そのような綺麗な色になるとしている。家運が良くないと考えた家から依頼されて草墳を構築する際や，作った後にクッを行う場合，あるいは死者を出した家の者が，草墳を作らないと家運が悪くなるのではないかと心配して予め観て欲しいと依頼に来る事もあるという。

墳墓を新しく作る時には，昔埋められた鬼神[22]と，新しく埋められる鬼神が戦う事があるのでクッを行わなくてはならない場合もあるという。特に家運が悪い時には，草墳を構築する際に家でクッを行い，さらに骨を墳墓に埋葬する際にもクッを行う。まず，山神に良い供物を捧げ，その後，かつてその場所に埋められた者の鬼神に対するクッを行う。また，草墳を作らず直ちに埋める場合には，一年に一度，三年間で3回クッを行うという。草墳を伴わない葬礼においても，依頼を受けた場合は，通夜の翌日にクッを行う。まだ葬礼の準備を行っている段階だが，死んだ人で新しい服を与え，魂魄を清める意味で，棺の前に服を用意し洗霊祭（シッキンクッ）を行う。

5），7）は，草墳構築と伝染病，あるいは麻疹との関係を示す例である。麻疹や天然痘の遺体を直ちに大地に埋葬せず，樹上などで晒した後に埋葬するとした例は，平安南道からも報告されているが，これは麻疹や天然痘が天魔である痘神に関わる病である故，その遺体を樹上に吊し痘神に捧げる必要があるとも解釈されている（依田1980）。青山島では，伝染病で死んだ者をそのまま埋葬すると土が汚くなるとされるが，この伝承は，陰暦1月は土を弄ると山神と土地之神が障るとする伝承と結び付いて語られた。また，島の占い師によれば，6）のごとく，陰暦2月はヨンドンハルモニが訪れる時期である故，土地を弄れぬとする。ただし，これが一般的に聞かれる伝承か否かについては，確認できていない。

2．草墳の形態と位置

以上のような理由を持って，草墳を設ける事にした場合，その草墳は，山腹などの家の墓地内に設けられるのが通例であり，その位置は，先代の死者が埋葬されている墳墓よりも必ず低い位置に構築される。先に埋葬された祖先に対して新しく埋葬される死者を劣位とする考えが墓地空間の構成上も示されている。

写真3-1は，Ａ里がその末端の平野部に位置する扇状地性の谷地を500㍍程登った山復に位置する草墳である（写真3-1，地図１上２の位置）。この墓地には，頂部近くに墳墓が設けられているが，そこから下に10㍍程降りた位置に草墳が設けられている。草墳は自然石を並べた台座の上に松の枝を敷き詰め，遺体の頭が祖先の墳墓に向くように棺を置き，屋根状の藁を被せて，前後に石の重りを結び付けた藁縄で全体を押さえている。自然石を並べた台座は，土地を平らにして，雨の際に水が棺に触れるのを防ぐためとされる。草墳の大きさは，長辺２㍍，幅１㍍，高さ１㍍程である。李は，この形態を平台葬（築台葬）に分類するが，西村は，地表との間に空間がないことからこれを平地葬に分類している（西村1985）。

写真3-1　明堂の円墳と草墳

写真3-2　草墳とバンチェ

また，後に解説する2002年12月３日に構築された草墳では上部に数本の松の枝が差し込まれており，これは死者の家族が，草墳構築の際に刺すもので，「魔除け」と解説する話者もいる。草墳の周囲は，松の枝で作られた，長辺４㍍，幅２㍍，高１㍍程の垣根であるバンチェ（防柵，방책）（写真3-2）で囲われる。このバンチェは，草墳の周辺などで放牧されている牛などが草墳を荒らすのを防ぐためのものとされる。また，バンチェを藁で覆う場合もあり，これは風除けとされる。草墳の中には全体を漁網で覆っているものもある。毎年旧暦12月には，草墳の屋根を葺き重ねるものとされる。また，家の屋根を葺き替える際には，まず草墳の屋根を葺き重ねた後に子孫の家の方に取り掛かるべきとされ，生者の家屋より，死者の遺体を安置している草墳の維持管理を優先する思考がうかがわれる。

3．草墳の構築過程―2003年12月３日Ａ里Ｂ女史の葬礼―

草墳の構築過程については，2002年12月３日に行われたＡ里Ｂ女史の葬礼において，遺族の了解の下，ビデオ撮影と観察記録作成の機会を得たため，それに基づいて報告する。なお，埋葬までの過程の細かな解説は，先に草墳を設けず，直ちに埋葬した事例を説明した際に報告した為，ここでは草墳構築を中心とした報告に止める事とする。2002年度の調査で観察の機会を得たのは，草墳構築前日の喪家の状態と，遺体の処理を済ませ入棺を終えた，当日の早朝からである。

草墳構築の前日の喪家　草墳構築の前日，喪家の入り口には喪家である事を示す花飾りが置かれ，門には，「謹吊」の文字と青山島のマークが書かれた黄色の提灯が吊されている。既に初終の過程が進められ，喪庁には屏風が立て掛けられた寝棺が置かれ死者が安置されている。屏風の前には死者の遺影を中心に霊座が設けられ御飯や果実類が供えられ，その前に香炉が置かれている。この葬礼では紙位牌である紙榜は作られてはいない。その左手には，魂帛（ホンベク，혼백）を納めた紙箱である魂帛箱子が置かれ百合やスズランの花が供えられた台がある。その前には，一本の蝋燭に明かりが灯されている。また，死者に手向けるための菊の切り花が数本，盆に乗せられて置かれている。庭には，既に喪服を纏った死者の遺族とＡ里の男性達が集まり，男性達は女性達が作った茹蛸の切り身やキムチを肴にして酒を飲んでいる。数人の男性は，庭の入り口横に積まれた藁を使って，草墳に使う縄を左綯いに綯っている（写真3-3）。また，棺に巻き付け草墳を形作るための片側が編まれた藁も纏めて置かれている。かつては30才位になれば，この藁を編めたというが，現在では70才を超えた高齢者でなければ編む技術を持っていないという。

写真3-3　草墳の準備をする老人

草墳構築当日の喪家　12月３日の早朝，出棺が行われた。Ａ里の喪家は，島を巡る広い環状道路から奥まった位置に在り，其処までは棺を乗せる喪輿を入れる事ができないため，喪家へ続く路地の入り口に喪輿が置かれている。喪家には，棺を担ぐ壮年男性達（喪徒軍）や，集落の老人達が既に集まっている。葬列で先頭を運ばれる銘旗や花飾りなどが先ず持ち出される。祭壇の前に，死者の息子，あるいは嫁の夫，５名が並び拝礼する。この後，死者の娘と息子の嫁が拝礼する。棺を担ぐ男達が土足のまま部屋に上がり，屏風や祭壇，供物などを庭に持ち出した後，棺を白い綱（絞布）で縛って行く。

出棺と発靷祭　遺影と魂帛箱子は竹で編まれた籠（霊輿）に入れられ，死者の孫娘が首から晒しを掛けて提げて，先ず部屋から庭に出る（写真3-4）。続いて男達は，太鼓の叩き手（先唱軍）の打つ太鼓の合図で，「カンノボーサ（観音菩薩）」の掛け声を叫びながら綱を引いて棺を持ち上げ部屋を出るが，この際に，棺が通る敷居の上に瓢箪を半分に切って置き，この上に棺の前部を落として瓢箪を割り砕く。棺が庭に出されると庭で棺を時計回りに３回廻し門を出る（写真3-5）。

写真3-4　霊輿

葬列と運喪　葬列は，簾持ちを勤める死者の孫にあたる青年，太鼓を叩く男性，遺影と魂帛箱子を持った孫娘，綱で棺を引き上げて運ぶ男達，遺族達と続く。路地に出た所で，用意してあった喪輿に棺を乗せ飾りで覆う。太鼓の合図と「観音菩薩」の掛け声の下，男性達が喪輿を担ぎ上げ，島の葬礼会館に葬列は進んで行く。途中，水路が道路の下を流れている場所まで来ると，担ぎ手達は，喪輿を道路に降ろして休んでしまう。道路を横切る形で５個の石が並べられており，先ず男性遺族が，続いて女性遺族が各々１万ウォンを石の下に挟んで行く。棺の担ぎ手達は，「こんな重い喪輿を担ぐのに金が少ない」など，様々に遺族へ言葉を投げ掛け，より多くの紙幣を石の下に挟ませようとする。頃合いをみて，太鼓の合図で，男性達は石に挟まれた紙幣を回収し，再び棺を担ぎ上げ，進んで行く。また，男性遺族を喪輿の前方に立たせ，そのまま喪輿を担ぎ上げる（喪輿遊び）が，この際にも，紙幣を輿飾りに結び付けるように要求する。

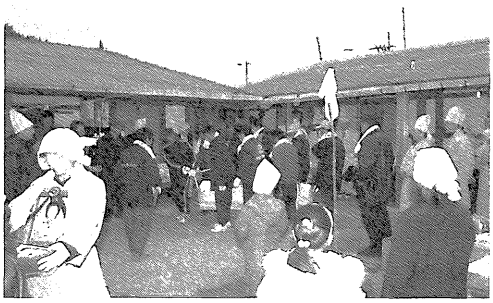


写真3-5　庭で棺桶を回す

葬礼会館でのチェサ　Ａ里から１km程離れた葬礼会館に到着すると，喪輿から棺を降ろし，会館に設けられた棺を安置するための部屋に納める（写真3-6）。その隣には板張りの大きな広間が設けられており，壁を隔てて棺を安置した場所に屏風を立て祭壇を再び設ける。祭壇は遺影と魂帛箱子を中心として，その前に，御飯・水・湯（スープ）が捧げられ，右側に，４個の玉子，一辺30㌢程の四角の餅を重ねたもの，左側に豚の頭が置かれる。次の列には，右側から太刀魚など焼魚類，中央に鯛類２尾，左側に豚の肋肉と魚（魚種不明）が置かれる。最前列には，右側から菓子，頂部を切った林檎３個，中央にバナナと蜜柑５個，

写真3-6　葬礼会館

左側に頂部を切った梨３個とイカのキムチを置く。祭壇の左右には蝋燭を１本宛灯し，その外側には花飾りが置かれる。祭壇の前には白い紙が敷かれ，中央に香炉が置かれ，線香，マッチなどが用意される。また，死者が好んだとされる甘酒や酒が用意され，チェサで捧げられる（写真3-7）。拝礼は，男性家族，女性家族の順に行われる。これらの供物の置き方や礼拝手順は全てＫ風水師の指導に従う。但し，Ｋ風水師が関与したのはここまでで，草墳の構築は，集落の老人達を中心に行われる。集まった集落の者達には，昼食と酒が振る舞われる。

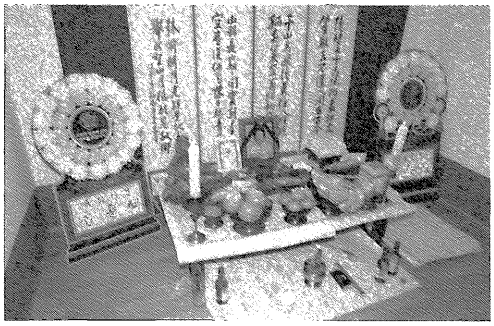
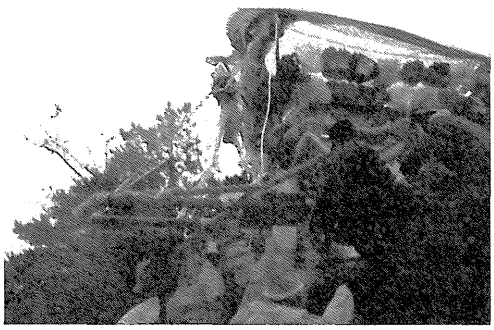


写真3-7　葬礼会館の祭壇

葬地まで　１時間程の休憩の後，死者の遺族は，簇持ちを先頭に，遺影と魂帛箱子を運ぶ孫娘に従い今一度，集落に帰り，生前死者が最も親しくしていた老人の家を訪れ，その家でチェサを行い，再び葬礼会館に戻る。再び棺を喪輿に乗せ，会館から100㍍ほど集落側に戻った位置に喪輿を降ろし，喪輿の前に太鼓を置くと，その上に，孫娘が運んでいる遺影の納められた籠をそのまま置き，祭壇を設け，供物を供えてチェサを行う。この場所は，草墳を設ける祖先の墳墓が位置する先山に面する場所で，遺族は遺体の納められた棺の向こうの祖先の墓地を拝礼する形となる。チェサの後，山へと向かうが，その途中には水路に掛けられたコンクリート製の橋の手前で，担ぎ手達は再び喪輿を地面に降ろしてしまう。道路に並べられた石の下に遺族が金を挟むと再び喪輿を担いで山道を登り始める。山道はかなりの急勾配で，２㍍程の高さのある石垣を超えなければ墓地へと至る事はできない。その際には喪輿の担ぎ手のみならず，死者の男性遺族も喪輿を支えて喪輿が石垣を超えるのを手伝う（写真3-8）。



写3-8　明堂に向かう喪輿

草墳の構築　墓地（地図１上３の位置）に到着すると直ちに喪輿から飾りを外し，棺を降ろす。既に，墓地には草墳を作るのに用いる藁束が用意されており，石の台座の上には松の枝が敷き詰められている（写真3-9）。草墳の位置は，祖先の墳墓が設けられた位置の下段となっている。太鼓の

写真3-9　台座に藁を敷く

音に合わせて，棺が台座の上に運ばれて来る（写真3-10）。棺の上に置いていた直径10㌢程の藁束を，台座の前後に置き，さらに藁を敷いて，その上に死者の頭が祖先の墳墓方向になるように棺を置く。この時点で太鼓は傍らに置かれ，以降叩かれる事はない。喪輿を解体した場所では，棺に被せていた飾りや，花輪などを燃やして処分する。棺の周囲に反時計回りに，藁を丁寧に巻き付けて行く（写真3-11）。藁は穂先方向が草墳の外側に向かうように根本側が藁縄に編み込まれている。また，その根本が草墳の背の部分で合わさるように気を付けて巻かれる。この作業の指導は，集落の長老達が行っている。ほぼ三重に藁を巻き付けた後，頂部に藁もう一度重ねて行く。さらにその上に，屋根となる背の部分を置く。この背の部分は，藁の根側の部分を左右から直径５㌢程の綱に編み込んで行ったもので，外側左右に藁の穂先部分が垂れ下がる形に作られている（写真3-12）。さらに背の綱の前後に30㌢程の石を化繊のロープで縛り付け，背が風などで飛ばないように重しとする。また，直径10㌢程の太い藁の綱を楕円状に背の上に置き背に縛り付ける。続いて藁縄を前後の重しの間に渡して，背の部分を押さえて行く。この時点で，遺族によるチェサが今一度，行われたが，この際も，草墳に納められた棺を通して祖先の墳墓を拝礼する形が採られた（写真3-13）。このチェサの後，遺影と魂帛箱子が納められた竹籠は，再び孫娘によって喪家へと帰って行く。草墳の構築はチェサの後，再開される。藁縄を前後の重しに渡して行き，背を押さえるが，この藁縄は背を挟んで左右が７本になるように渡されている。そして，その藁縄と直交する形で，草墳全体を横から押さえる縄を，３本編み込んで行く（写

写真3-10　台座に棺桶を置く

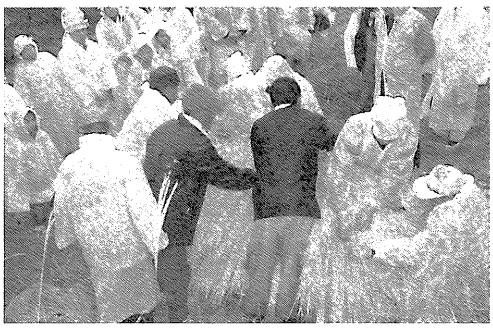


写真3-11　藁を巻き付ける

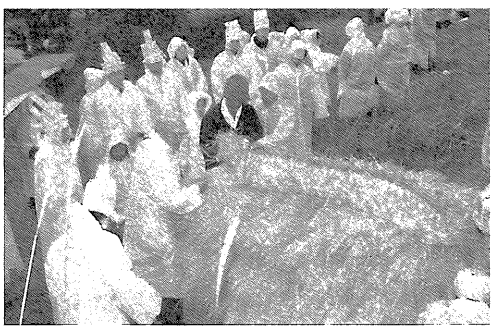


写真3-12　屋根となる部分を置く

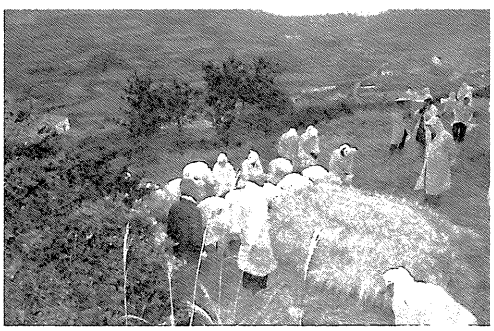


写真3-13　草墳での拝礼

真3-14)。この3本の横縄の先には，やはり重しの石が縛り付けられる。以上で，草墳自体の構築は終わるが，この後，死者の男性遺族達が松の枝を折り取り，それを草墳の背の部分の左右に12本宛，差し込んで行く（写真3-15)。長老は，草墳がしっかりと構築できたか否かを丁寧に確かめて行く。完成した草墳は長さ2.5㍍，幅と高さ1.5㍍程であり，前後左右に計8個の石の重しが付けられている（写真3-16，3-17)。この時点で，遺族から草墳構築が終わったので，帰るように促され3名の男性遺族のみが現場に残り，他の者達は集落へと引き揚げた。恐らく，後日，草墳の周囲に松の枝の垣根が設けられたものと思われる。なお，この草墳構築の過程においては，治葬時における山神や土地之神に対する儀礼は確認できなかった。

写真3-14　縄を編み込む

写真3-15　松の枝を挿す

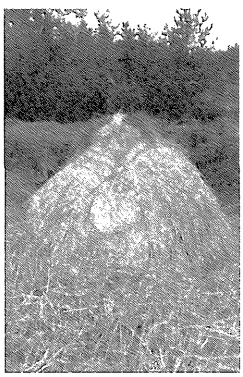


写真3-16　草墳の正面

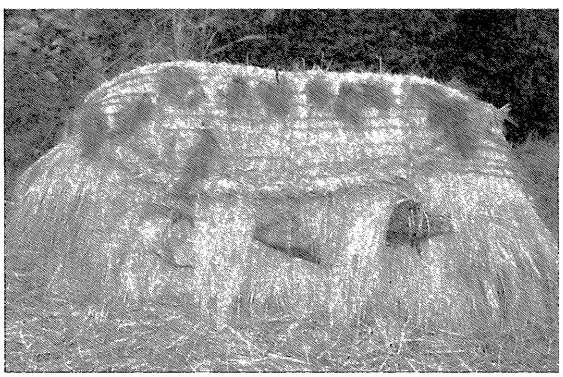


写真3-17　草墳の側面

4．草墳の解体（破墓）と移葬

青山島では，以上のような過程を経て，草墳を構築している。この後，一般的には3年後，K風水師が指定した日時，時間に草墳は解体され，遺体は埋葬される事になる。報告者は，その過程は観察できなかったが，2001年5月に行われた草墳の解体と移送の過程について，古家信平氏による撮影記録があるので，これを基に，簡略に報告を行う。なお，先にも述べたが，この例では，草墳を解体し，遺体を移葬・埋葬するに際して，棺の蓋が開けられ白布は遺体に掛けられる

が，遺体そのものは取り出されず，遺族が骨から残った肉を落とし，白布に包むなどの行為も行われてはいない。

墓穴の構築　墓地では2基の墳墓が並んで作られる事になる。K風水師は，風水盤を地面に置き水糸を張って，遺体を埋葬する方位を確認する。山役により墓穴が掘られると，石室の底と側面にあたる石板をはめ込んで行く。K風水師は石版が指定した方位から外れていないかどうかを側板に沿って水糸を張り，風水盤を当てて確かめる。石室の周囲には，塚の側面にあたる石板を置いて行く。長方形に台座の部分を置き，四隅に石柱を立て，その間に，石板をはめ込み，さらに上に石板を置く。

草墳の解体（破墓）　解体される2基の草墳は，今回移葬先となる明堂から集落を挟んだ向かいの丘の林の中に位置している。草墳から取り出された棺の一つには，横に5本，側面を1本の縄，今一つには，横に9本，側面に1本の縄が掛けられている。棺の前側左右を死者の遺族と思われる頭巾を被った2名の男性が引き上げ，後側左右は頭巾などを被っていない2名の男が綱を引いて棺を引き上げ，埋葬する墓地まで運んで行く。葬日におけるような，銘旗や遺影による先導もなく，太鼓や唄なども伴わない。解体され棺が取り出された草墳には，直ちに火が放たれて焼かれてしまう。その場に残った男性遺族が太い松の枝で，火勢を調節する。なお，この例では草墳の解体過程そのものは撮影されていないため，別の日に撮影された2基の草墳の解体過程をここでは付記する。

早朝遺族は草墳が作られている山に行く。男性遺族は黄の頭巾を被り脚絆を身に着けている。K風水師は草墳の前に遺族が用意した供物を供え，遺族は礼拝する。その後，K風水師が祝文を読み上げ，それが終わると草墳の解体が始まる。草墳の前後の重しを切って外し，全体を押さえていた縄を取り去り，崩して行く。全ての藁を取り除き棺を露出させる。この棺には松の枝が乗せられていたが，これも除かれる。遺族2名を含めた8名で棺の綱を引いて持ち上げ，一旦，崩した草墳の外に運び出した後，遺族以外の4名で運んで車の荷台まで運んで行く。棺を荷台から降ろし，埋葬する墓地まで4名で運ぶ。棺の上の前後には藁束が乗せられている。棺の上シートが被せられ，供物が供えられて遺族による拝礼が行われる。

治葬　墓地では，山役達によって，石版で側面を構築した長方形の2基の墳墓がほぼ完成しており，その横に棺が置かれる。墳墓の石室に，多量の石灰が撒かれ均される。棺の綱は解かれている。墳墓の側には，「顕考學生府君　神位」と印された紙榜と死者の衣服の一部を紙箱に収めた魂帛箱子と銘旗が丸めて置かれている。棺の蓋がK風水師によって開かれると死者の女性遺族による涕泣が起こる。K風水師は棺の詰め物を取り出して行く。遺体は白い布に包まれている。K風水師は新しい白布を用意し，遺体の上に拡げて掛ける。棺の蓋を開けたまま持ち上げ，墳墓の石室の中にゆっくり納めて行く。K風水師は石室と棺の間を調整して四辺が均等に空くようにする。続いて重機で石灰を大量に掛け，遺体を埋める。石灰を均した後，石版を頭の方向から乗

せて蓋をして行く。石版の上の土を除いて綺麗にすると，赤に近似の「學生□□□公之柩」と金字で印された銘旗を拡げて石版の上に掛け，三度，銘旗に書かれている文字を読み上げる。石灰の混じった土が遺族によって一杯宛掛けられて行く。遺族は，既に喪服は着ず，男性は黄の頭巾を被り，女性は頭に黄のタオルを巻いているのみである。その後，重機で土を盛り，上部に芝を重ねて，楕円状の墳墓を構築して行く。

成墳　墳墓の構築が終わると，その前部に紙榜を置き，墳墓の前の石の台にチェサのための供物を置いて行く。魚や赤い物は東，肉や白い物は西が決まりとされる。１名の男性遺族が酒を捧げ，３名の女性遺族と共に礼拝する。Ｋ風水師は遺族全員に祭器を持たせ，酒を注ぎ，男性に供えさせる。御飯は十字切って匙を刺し，箸も叩いて音を出して，死者に知らせておく。Ｋ風水師が祝文を読み，遺族が再び礼拝する。礼拝が終わると，Ｋ風水師は御飯，餅，モヤシ，椎茸，肉などの供物の少量を箸で紙皿に乗せる。墳墓の頂部に浅い穴を開けさせ，魂帛箱子をそこに置くと，上から取り分けた供物を乗せ，土と芝とを掛けて固めさせる。また，墳墓の前に置いていた紙榜を遺族に渡す。遺族は紙榜を家に持ち帰りチェサを行う事になる。墳墓の前でも供物を遺族で共食する。

家でのチェサ　家屋内に設けられた喪庁では，ボウルに生米を入れ，そこに遺影と紙榜を立て，その前に，御飯，杯の酒，魚の湯を置き，向かって右に焼き魚と林檎・梨をその左横に海鮮の水煮と思われるものと西瓜を置いてチェサを行う。

第４章　改葬と草墳の解体・移葬―2006年９月２日，３日Ａ里Ｃ家の墓地改葬 -

続いて，墓地の改葬と草墳の解体，移葬が並行して行われた事例を報告する。

１．Ｃ家の墓地改葬について

Ｃ家は，青山島Ａ里の北に位置する。Ｃ氏は学校教員を長く勤め，現在は退職しているが島の中でも信頼が厚い人柄である。Ｃ氏の家が位置するのは，島でも屋敷取りが広い家々が道路に面して並ぶ地区であり，同じ道路沿いに旧里長で2006年度よりＫ風水師から風水師の役目を引き継いだＴ氏の家もある。

2006年９月２日，３日に改葬を行う事に決めたのは，同月が陰暦閏７月にあたるためであり，この期間が草

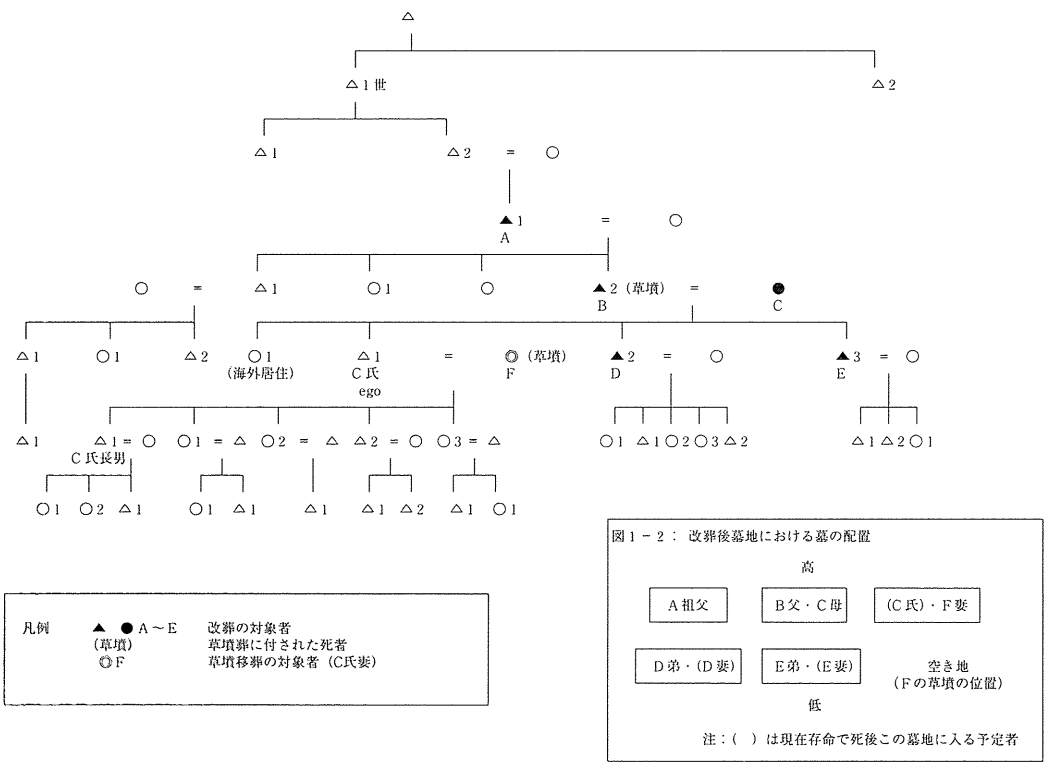
地図２　Ｃ家墓地の位置
（原図　国立地理院地図）

墳の解体と移葬や，墓地改葬に最も適した時期とされているためだという。今回，墓地改葬の対象となったのは，地図２上Ａ，Ｂ，Ｃ，Ｄ，Ｅの五つの墳墓である。この内，Ａ，Ｂは，Ａ里より１kmほど離れた海岸に面した森林中の明堂に構築されている。Ｃは，家々の墓地が散在する明堂のＡ里を望む位置にあり，またＤとＣにほど近い場所に位置する。

今回の改葬では，これらの墓地は地図上Ｆの位置に纏められたが，この場所からは左右を丘に挟まれた耕地とその先の海を望む事ができ，さらにはその海に芝草島が浮かぶ，風水的に大変良い土地だとＴ風水師は解説する。このＦの位置は，既に重機により整地されており，また今回解体される草墳Ｆは以前よりこの場所に構築されている（写真4-1）。各々の墳墓，および草墳には，以下の人々が葬られている（図１参照）。

写真4-1　改葬先の新明堂と草墳

図１：Ｃ家親族図



墳墓Ａ：Ｃ氏の祖父（没年碑文に記載なし。90年前に死亡とされる），墳墓Ｂ：Ｃ氏の父親（碑文の記載では1965年死亡），墳墓Ｃ：Ｃ氏の母親（同1989年死亡），墳墓Ｄ：Ｃ氏の弟（次，同1976年死亡），墳墓Ｅ：同左（三男，同1987年死亡），草墳Ｆ：Ｃ氏の妻（同2004年死亡）

基本的に，C氏に極めて近い親等の上位直系親族ならびに傍系親族が改葬の対象となっている。これらの親族，およびC氏の妻が一カ所の墓地に集められる事となったのは，各々の墓地が大変離れた場所にあり，祭祀に不便であり，また父親と母親が別の場所に埋葬されていたためであるという。これらの死者の内，C氏の妻の他に，父親が草墳葬を経て埋葬されている。

新しく明堂とされる場所には，これらの死者を全て埋葬し，墳墓を構築できる広い場所となっている。この場所に図１－２の配置で遺体が埋葬され墳墓が構築された。明堂の傾斜面の上部左から，祖父の墳墓と父母を合葬した墳墓が並び，そのさらに右にC氏の妻を埋葬した墳墓が構築された。C氏が死亡した場合には，現在，妻のみを埋葬している墳墓に彼も合葬される事になる。これらの墳墓の下の位置にC氏の弟二人の墳墓が左から次男，三男の順に並ぶ。何れも，その妻が死亡した場合には，夫の横に合葬され合墳が作られる事となる。図上Eの左隣は，墓地改葬前からC氏の妻の草墳が構築されていた場所であるが，草墳の移葬後は空き地となり，一族の中で墓が必要になった場合に使われる予定である。

C氏は，その妻と自身が入る墳墓を最初はこの空き地となっている場所に作る事を集まった親族に提案したが，親族一同から，明堂の上部に，祖父やその両親と並んで祀られるべきだと強く説得され，その場所に墓地を定めた。

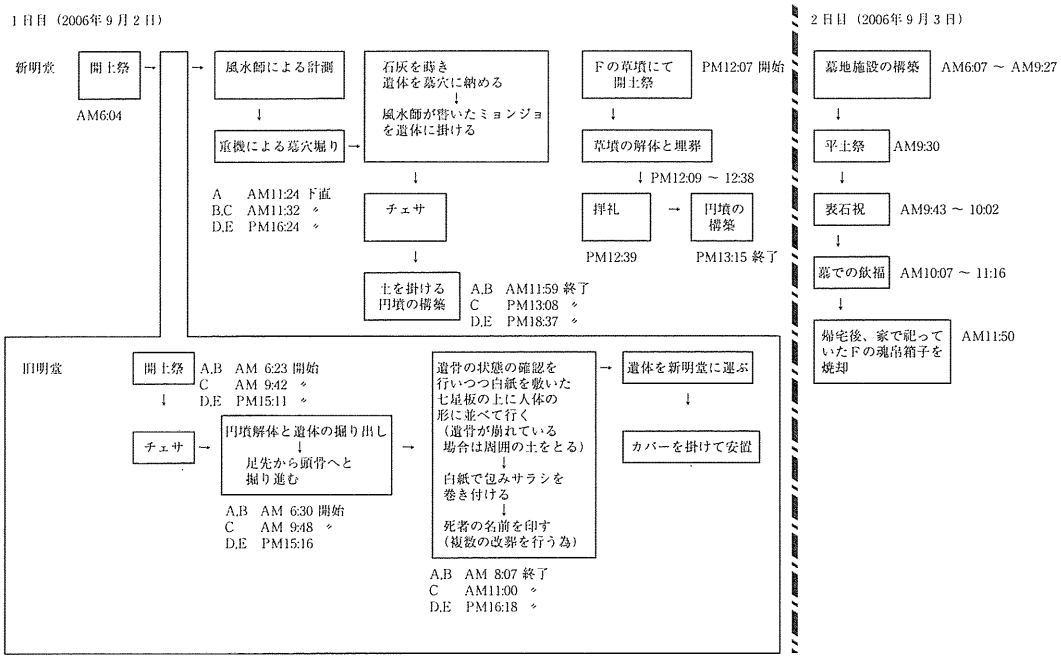
以上からは，基本的に高位の直系先祖を明堂の上部左側から右側へと並べ，下位の傍系の死者を明堂下部に並べる法則性をみる事ができる。草墳の構築されていた場所は，明堂の中では最も下位に当たる場所である。

２．墓地改葬と遺骨処理，草墳の解体・移葬の過程

１）．９月２日の儀礼

C家における墓地改葬，ならびに草墳の解体，移葬の大かな流れを図２として整理した。旧明堂からの遺骨の掘り出しは，９月２日の早朝から午前中にかけて，C氏の祖父，父親，母親の順に行われ，間にC氏妻の草墳の解体と移葬を挟み，昼食の後，C氏兄弟二人の順に行われた。

図２：2006年９月Ｃ家改葬の流れ（改葬した墓は５カ所、途中草墳の解体と埋葬も行う）



明堂での開土祭　９月２日の早朝５時頃からＣ氏の自宅では，チェサや飲福に用いる食物の準備が始まっていた。Ｃ氏の息子やその嫁や子供達の多くは島外で生活しているが，前日からＣ氏の家に泊まっている。５時30分には自宅を出発し，新にＣ氏と風水師のＴ氏，およびＣ氏の長男，次男は軽トラックで新明堂のある山へ移動した。新明堂では，その上部にあたる場所で，まず開土祭を行った。

開土祭では，「土地之神位」と墨書された木の杭を地面に打ち込み，その前に小振りの鯛とゆで卵，真露（焼酎）を供えて，Ｔ風水師が開土祝を唱える（写真4-2）。

ここでいう土地之神が，いわゆる山神にあたるものであるかは，聞き書きでは十分な確認はできなかった。

写真4-2　土地之神位を立てる

開土祝

開土祝
維　　幼學□□□（C氏長男）
歳次機丙戌閏七月巳酉朔十日甲午
敢昭告干
土地之神今為□
□□□（C氏長男）曾祖父
顕祖父考學生府君
□□□（C氏長男）祖父母
顕祖考學生府君
顕祖母儒人□□□氏
□□□（C氏兄弟次男長男）父親
顕考學生府君
□□□（C氏兄弟三男長男）父親
顕考學生府君宅兆不利将改葬干此
神其保佑俾無後艱謹以清酌脯醢
祇薦干神　尚
饗

土地之神位と山神とは明確に区別されずにT氏によって祀られた可能性もある。

T氏による開土祝の後，C氏とその息子達が拝礼し，さらにC氏が鍬を手にして，土地に一鍬打ち込み，土を掘り起こした。この後，三名は祖父と父親が葬られている旧明堂へ車で移動し，そこでも開土祭を行った。まず，最初に開かれる祖父の墳墓の前で，T風水師が，そこに眠るC氏の祖父と父親に対して啓墓祝を唱える。その内容はこれから墓を壊す事に許しを求め，驚かぬように断るものである(写真4-3)。

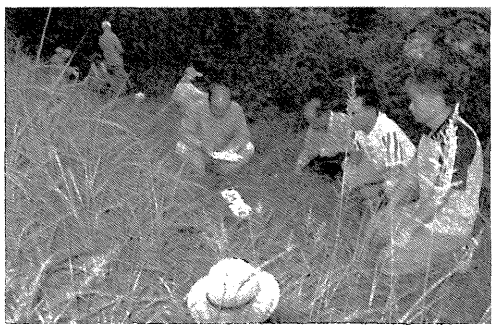


写真4-3　啓墓祝を唱える丁風水師

その後，鯛とゆで卵，真露（酒）を供えてC氏と二人の息子が礼拝し，続けてC氏が鍬を墳墓上部に入れて開土祭を行った。それぞれの墳墓での啓墓祝は，前掲の開土祝をそれぞれの墳墓に眠る者に対して個別に唱えるものであり，これから改葬するが驚く事のないように許しを請うものである。

この後，C氏の父親が眠るBの墳墓に対しても同様の過程で開土祭を行った。その時間帯には，集落で雇われた山役の男達が6名現地に集まり，開土祭が終わると同時に，二つの墳墓の掘り起こしを開始した。

啓墓祝

維　幼學□□□（C氏長男）
歲次機丙戌閏七月二酉朔十日甲午
敢昭告干
土地之神今為
□□□（C氏長男）曾祖父
顯祖父考學生府君
□□□（C氏長男）祖父
顯　祖考學生府君卜宅茲地恐有他患將啓
突遷干他所神其保佑俾無後艱謹以清
酌脯醢祇薦干神尚
饗

維　孝曾孫□□（C氏長男）
歲次機丙戌閏七月二酉朔十日甲午
敢昭告干
顯　曾祖考學生府君葬干茲地歲月茲久
軆魄不寧今將改葬伏惟尊靈不震
不驚
維　孝孫□□（C氏長男）
歲次機丙戌閏七月二酉朔十日甲午
敢昭告干
顯　祖考學生府君葬干茲地歲月茲久
軆魄不寧今將改葬伏惟尊靈不震
不驚

祖父と父親の墳墓の解体と遺体の掘り出し

墳墓を崩して，棺が納められている場所をある程度掘り進むと，集落でも骨を土中から集める事が上手とされる男性が小さな籠手を手にして穴に入り，遺体の足側から骨を壊さないように慎重に土砂と骨とを選り分け，骨を容器に拾い上げて行く（写真4-4）。これを拾骨と称する。穴の横には七星板が置かれ，その上に白い韓紙が敷かれて，骨を受け取ったT風水師が足先から頭の方向へと順番に並べて行く。七星板は，紙榜を大きくした形をしており，板の長辺の左右には各々七つの穴が上から下まで等間隔に開けられている。祖父の骨は，埋葬されて時間が経っている事もあり，大腿骨の一部を除いて土との分別が難しい状態であったので，各々の骨があったと思われる場所の土を取って，それを七星板の上に置いて行った（写真4-5）。大まかに人体の形に並べると，それを韓紙で包み，さらに，サラシで巻き上げられた（写真4-6）。足の部分には，間違えのないように遺体の名が記された。

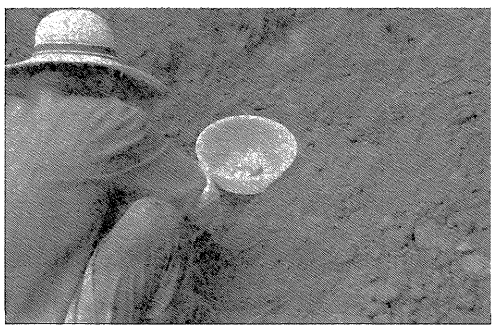


写真4-4　骨を拾う

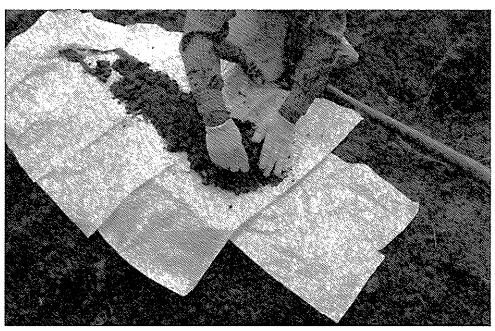


写真4-5　骨の代わりに土を取る

遺骨の並べ方　続いて父親の遺骨も同様の手順で掘り上げられたが，こちらは比較的遺骨が原型を留めており，特に最後に掘り上げられた頭骨が丁寧に扱われ，下顎骨と慎重に組み合わされた（写真4-7）。改葬において頭骨が特に丁重に扱われる傾向は，以降の墳墓の掘り上げの際にも認められ，それまで大声で雑談しながら掘り上げの見物をしていた親族達が，頭骨を取り出す段階になると声を出すのを控え，女性の参加者からは涕泣の声が聞かれる場合もみられた。

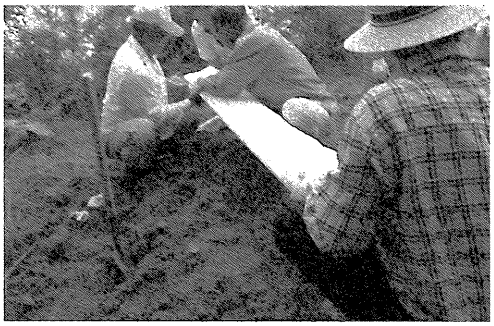


写真4-6　七星板と遺骨を白布で巻く

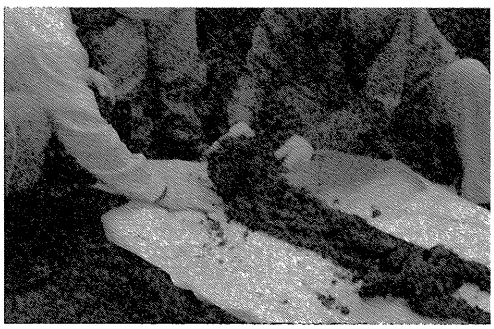


写真4-7　頭骨を顎骨を丁寧に組む

遺骨を掘り出す際には，掘り出された遺骨がしっかりと形を残しているかや，その色などについて雑談が交わされた。C氏の父親や母親の遺骨はしっかりとした形で残っていたが，「その場所が良かったのだろう」などと語られていた。七星板に並べられる遺骨は，足先から頭骨まで生前の骨の配置に従って並べられる必要があると考えられている。この他の事例も参照すると，骨の並べ方は大まかに以下の順序となる。

①足先→②膝頭→③膝骨→④大腿骨→⑤骨盤→⑥背骨→⑦肋骨→⑧腕の骨→⑨手と指の骨→⑩下顎骨→⑪頭骨

この順番は，今回の改葬の事例でほぼ共通している。ただし，C氏の兄弟の遺骨を並べる際には，背骨を置いた後，左の肋骨と腕の骨，右の助骨と腕の骨の順に並べた。サラシを巻く際にも，遺骨を人体の形のまま七星板の上に固定する事に注意が払われていた（写真4-8）。

写真4-8　遺骨の配列を調える

これは，最後に掘り上げられたC氏兄弟の墓での事であるが，T風水師が骨を並べて韓紙に包もうとしたところ，親族の高齢女性から「下顎の骨と頭の骨が上手く噛み合っていない。これでは食事がとれない」との指摘があり，もう一度その噛み合わせをやり直す場面もあった（写真4-9）。この下顎骨と頭骨との噛み合いは，母親の遺骨を並べる際にも慎重に行われている。この七星板の上に遺骨を生前の構成で並べる行為は，鄭も指摘する骨からの再生を想起させるものである（鄭2003）。下顎骨への留意は，死者があの世に

あっても供物を採れるようにとの配慮と思われる。

サラシに包まれた祖父と父親の遺体は，C氏と長男によって新明堂に運ばれ，墓穴が掘られるまで，カバーを掛けて地面に安置された。

写真4-9　下顎を嵌める

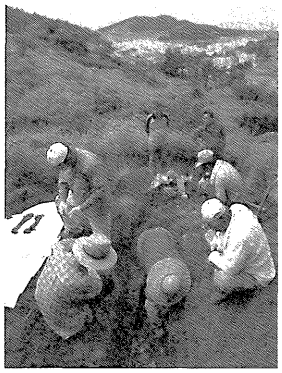


写真4-10　母親の墓の改葬

母親の墳墓の解体と遺骨の掘り出し　続いて，C氏の母親の墳墓（C）から遺骨が掘り出される。その過程は，先に解説したものと変わるところはないため省略するが，この墓では，遺体の上に撒いた石灰土が水分で石膏のように固まり，蓋の役割を果たし，大変保存状態が良く，木棺や銘旗も残っていた（写真4-10）。遺骨は七星板に並べられ，サラシで巻かれて新明堂へと運ばれた。

墓穴の計測　新明堂では，T風水師とC氏が協力して墓穴を掘る位置を計測する。風水板を中央に挟んでメジャーを延ばし，木の枝なども用いて遺体が埋葬される際の頭骨の方向が厳密に定められる。この計測に従って重機で墓穴が掘られる。祖父と父親，母親の遺体を埋葬する墓穴には，花崗岩の板囲いを作る事は行わなかったが，C氏の妻の棺桶を納め，C氏が亡くなった場合に合葬される場所の墓穴には，花崗岩の板囲いが作られた（写真4-11）。C氏の兄弟を埋葬した場所では，その遺体を納める場所には板囲いは作られなかったが，その妻達が死後合葬される予定の場所には板囲いが作られた。これは，棺桶を納めやすくするためのものであるという。

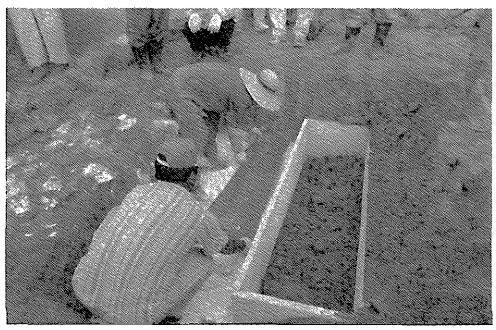


写真4-11　合葬される予定の墓穴

遺骨の新明堂への下棺・埋葬と墳墓の構築　祖父を埋葬する墓穴，および父親と母親を合葬する墓穴には，それぞれ石灰が敷かれ，サラシに包まれたままの遺体が置かれ，その上に銘旗が掛けられる（写真4-12）。遺体に銘旗を掛けると，一族の男性が集まり，墓穴の前で拝礼し，土を掛け墳墓を構築して行く。最初に土を掛けるのは，死者の直系の子供であり，男性，女性の順に掛けている。

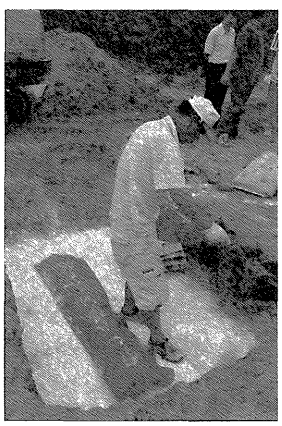


写真4-12　埋葬

草墳の解体と移葬　祖父の墳墓が完成した10分ほど後，Ｃ氏の妻が眠る草墳の解体が行われた。草墳の前にゆで卵と真露が供物として置かれ，Ｔ風水師がこれから草墳を壊す事をＣ氏の妻に伝える祝文を読み上げ，並んだ子供とその配偶者，孫達が拝礼を行う（写真4-12）。草墳の解体は山役の一人とＣ氏が行う。押さえの縄が切られ草墳から屋根の部分が外されるが，亡くなってまだ２年しか経過していないため，年末に重ねられた屋根の部分も一枚のみであり，内部の藁もまだ新しい（写真4-13）。棺が現れると，それを開く事はせずに，山役二人とＣ氏長男と次男とでそれを持ち上げ（写真4-14），墓穴へと納めた（写真4-15）。注目されたのは，山役の一人が棺桶が持ち上がったとたん「カーノボーサ（観音菩薩）」の掛け声を掛け，墓穴に降ろすと同時に，その声を止めた事である。発靷祭においても，棺桶を持ち上げると同時にこの掛け声が掛けられ，下直と同時に止められる。短い距離ではあるが草墳から墓穴への棺桶の移動は，発靷より治葬に至る間の葬列と同じ意味のものとして山役には考えられたものと思われる。墓穴に納められた棺桶には銘旗が掛けられ，子供達による拝礼の後，墳墓が構築された。この後，昼食が振る舞われた。

Ｃ氏弟達の墳墓での遺骨の掘出しと新明堂への安置　昼食後，Ｃ氏の弟達の墳墓（Ｄ，Ｆ）の解体と遺骨の掘り出しが行われた。その過程は，前述の過程とほぼ同様であるため，内容の紹介は省略する。５つの墳墓がほぼ完成したのは，陽も沈み掛けた夕刻であり，初日の作業はここで終了した（写真4-16）。

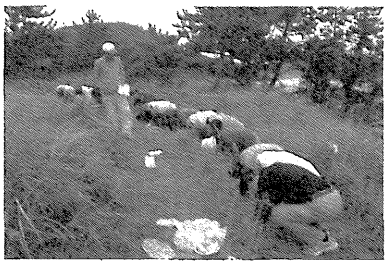


写真4-12　埋葬

写真4-13　妻の草墳の解体

写真4-14　棺桶を運ぶ

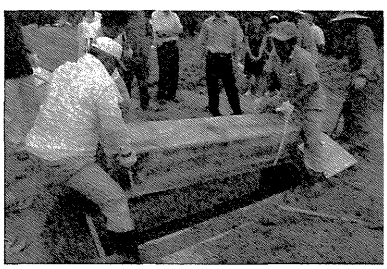


写真4-15　埋葬

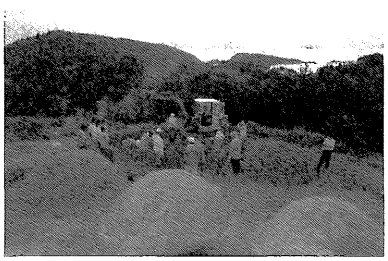


写真4-16　円墳の構築

2）．9月3日の儀礼

新明堂設備の構築　9月3日の早朝，再びC氏とその子息，T風水師，山役の男達が新明堂に集まる。重機を用いて，墳墓前の祭壇や，神道碑などを立てて，墓地の設備を整え，一通りの設置を終える。

平土祭　まず最初にこの明堂の土地之神に対してチェサを行い改葬が終わった事を伝える。また，C氏の妻は改葬ではなく，草墳からそのまま安葬したことを申し伝える。供物は，小鯛，豚，リンゴ，ブドウ，真露を盥に並べ，以下の平土祭祝文をT風水師が唱えた後，男性親族が拝礼する（写真4-17）。

平土祭祝文

維　幼學□□□（C氏長男）
歲次機丙戌閏七月巳酉朔十日乙未
敢昭告干
土地之神今為
□□□（C氏長男）曾祖父
顯曽祖考學生府君
□□□（C氏長男）祖父母
顯祖考學生府君
顯祖母儒人□□□氏
□□□（C氏兄弟次男長男）父親
顯考學生府君
□□□（C氏兄弟三男長男）父親
顯考學生府君宅兆不利將改葬干此
神其保佑俾無後艱謹以清酌脯醢
祇薦干神　尚
饗

維　幼學□□□（C氏長男）
歲次機丙戌閏七月巳酉朔十日乙未
敢昭告干
土地之神今為□□□（C氏長男）母親
顯母儒人□□□氏突茲幽宅神其神其保佑
俾無後艱謹以清酌脯醢祇薦干神　尚
饗

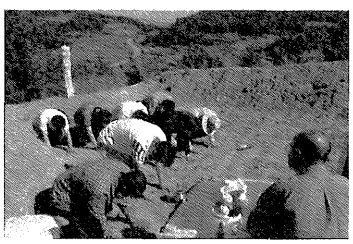


写真4-17　墓前でのチェサ

写真4-18　供物を包む

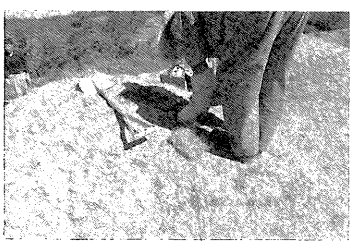


写真4-19　供物の埋納

各墓での表石祭　続いて，それぞれの墳墓の前で墳墓の表石祭をそれぞれ行って行く。先にも述べたが，K風水師も墳墓の完成後の儀礼を平土祭としていた。T風水師も成墳祭あたるものとして平土祭と表石祭を行っているものと思われる。C氏祖父（A），父と母（B・C），C氏妻（F），兄弟次男（D），兄弟の三男（E）の順で進めるが，祖父の墳墓でのチェサが終わった後，供物の一部を和紙に包み（写真4-18），墳墓の頂部に埋納する（写真4-19）。供物は水煮の豚，真

露，餅，蒸菓子，水の煮魚，野菜・海鮮の和え物，スイカ，バナナ，リンゴ，梨，ブドウなどであった。墓前での表石祭祝文を以下に挙げる。

表石祭祝文

維　幼學□□□（C氏長男）
歳次機丙戌閏七月巳酉朔十日乙未
敢昭告干
土地之神今為
□□□（C氏長男）曾祖父
顯曽祖考學生府君之墓
□□□（C氏長男）祖父祖母
顯祖考學生府君之墓
顯祖母儒人□□□氏之墓
□□□（C氏長男）母親
顯母儒人□□□氏之墓
□□□（C氏兄弟次男長男）父親
顯考學生府君之墓
□□□（C氏兄弟三男長男）父親
顯考學生府君之墓墓儀未具今將
誌石床石望柱石用衛神道神其
保佑俾無後艱謹以酒果祇薦干
神尚
饗

維　孝子□□□（C氏長男）
歳次機丙戌閏七月巳酉朔十日乙未
敢昭告干
顯母儒人□□□氏形帰宅□神返室堂
神位既威伏惟尊靈今旧従新是憑
是依

（C氏長男の祖父，祖母に対しても右とほぼ同じ内容の祝文が用意される。左は長男から母親への祝文である。C氏兄弟次男，三男に対してもほぼ同じ内容の祝文が用意される。）

墓での飲福　以上で，新明堂での儀礼は一通り終わり，参集者による飲福（共同飲食）が行われた。

帰宅と喪房の魂帛箱子の焼却　C氏は，帰宅後，死者の寝室の壁に掛けられていた，妻の魂帛箱子を取り外す（写真4-20）。草墳構築期間はこの部屋が喪房とされていた。魂帛箱子の中には，この時点では紅と玄の絹，紙榜が納められている[23]。取り外された魂帛箱子は，庭先に持ち出され焼却された（写真4-21）。遺影は暫く壁に掛けたままにしておき，後に部屋の天井近くに並べられた遺影や家族写真とともに並べるという。

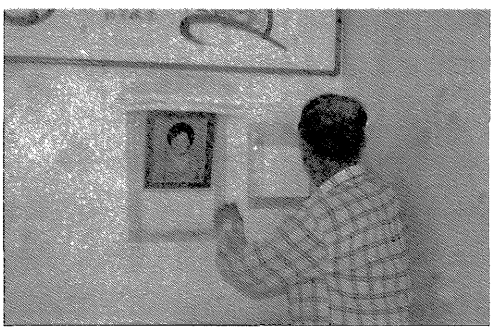


写真4-20　喪房の魂帛箱子を外す

写真4-21　魂帛箱子の焼却

第５章　現代の青山島葬墓制における草墳葬の位置

死者を表す祭祀具について　報告の最後に，青山島の葬礼における遺体と，死者を表象する祭祀具である銘旗・遺影・紙榜・魂帛箱子の移動過程について解説を加える。草墳を伴わず，遺体が直ちに埋葬される生葬の場合を図３，草墳による遺体の骨化期間を伴う葬礼の場合を図４，改葬と並行して草墳の解体・移葬が行われたＣ家の事例を図５として整理した。

図３：生葬における死者を表象する祭祀具の移動と祭祀（第２章の事例に基づく）

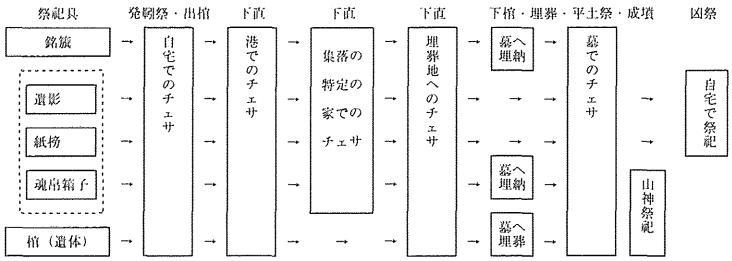


図４：草墳葬における死者を表象する祭祀具の移動と祭祀（第３章の事例、および聞き書きに基づく）

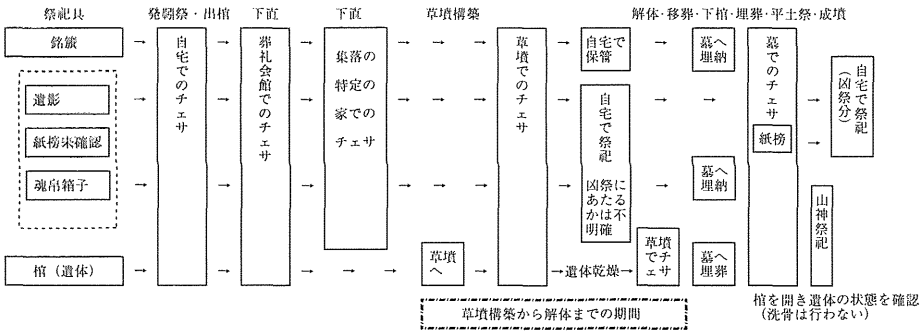
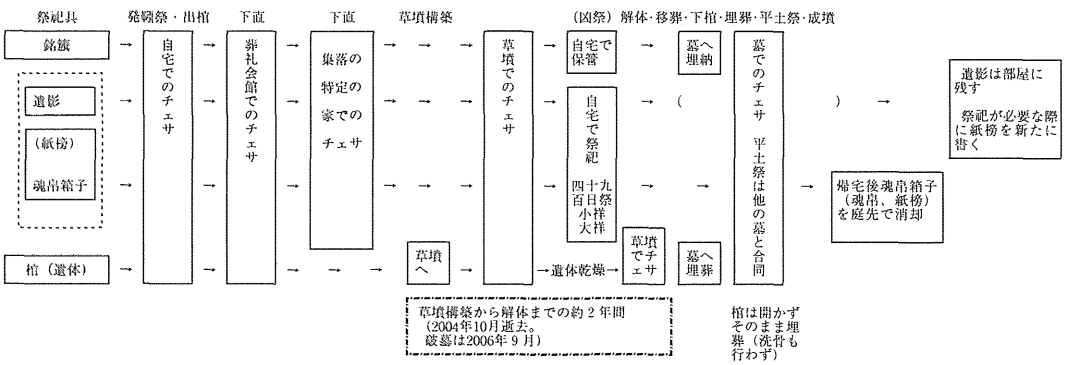


図５：Ｃ家草墳解体時における死者を表象する祭祀具の移動と祭祀（第４章の事例に基づく）



死者を表象する伝統的な祭祀具の内，魂帛箱子は，遺体から死によって一時的に離れた死者霊魂を，風水師が招魂儀礼によって宿らせ，葬礼の過程にそれを留め置いている事を示すものと考えられる。魂帛箱子は，埋葬の段階で，墳墓の上部に供物と共に埋納されるが，K風水師によれば，本来は，図4のごとくこの時点で紙榜が作られたとされる。その場合死者を表象する祭祀具としては，そちらに役割が引き継がれる事になる。

注意されるのは，青山島においても葬礼やその後の凶祭において遺影が死者を表す祭祀具の重要なものとして用いられている点である。論者の観察できた事例においては，遺影は，喪房に安置された棺桶の前の霊座に置かれ，魂帛箱子とともに竹籠（霊輿）に納められ，遺族の首から提げられて運ばれ，生葬の場合は成墳祭まで儀礼の場面場面で霊座の中心的な位置に据えられる。生葬の場合は，死者の表象として，埋葬後，最後に家に持ち帰られ，大祥まで（二年喪の場合は小祥まで）の凶祭の対象となるのは，遺影と紙榜である。

遺影がいつ頃から青山島の葬礼に用いられるようになったのかは，現時点では確認がとれていないが，遺影は紙榜や魂帛箱子に比して死者の面影を映像として明確に示すものであり，遺族に限らず，葬礼への参加者に強い印象を与えるものである。また，遺体が埋葬された後は，遺影は，遺族にとっては死者そのものを想起させるものともなる。現代の青山島の葬礼にとって，遺影は死者を表す重要な祭祀具としての位置を占めるようになっている。

葬礼における草墳葬の位置　青山島の現在の草墳葬では，臨終から遺体の埋葬へと三日ないしは五日で至る通常の土葬の過程に草墳構築・数年の草墳での安置期間・破墓（草墳解体）・安葬でない場合は遺体の確認・移葬という一連の過程が挿入される形を基本的にはとる。草墳を構築する場合であっても，草墳を作る場所への下棺まで，下直の場所や回数などに違いはあるが，その儀礼の流れには基本的に直接埋葬する場合とあまり差異は認められない。また，草墳を解体して本埋葬を行うまでの過程も，草墳の期間を加える事により本埋葬は，その期間ずれ込む事になるが，一部の事例で埋葬する前に棺を開いて遺体の状態を確認し，白布を掛ける風水師の行為が加えられる以外の差異は特に認められない。4章で紹介したC家の例では棺を開く事自体を行わず，安葬としていた。すなわち，現代の青山島の葬礼では，遺体を直接埋葬（生葬）する葬礼の過程に，草墳葬の過程である草墳構築・遺体の安置期間・破墓・移葬などが挿入される形を採っているように思われる[24]。

また，草墳葬は仮の葬礼で，草墳の解体から治葬，成墳までが本葬（本当の葬礼）だとする説明が島でも聞かれる。しかし，実態としては，死者の発生から草墳構築までが，共同体全体でそれを支える大規模な葬礼として，多数の村の人々が集まる中で実施されており，対して草墳解体から成墳までは，死者の親族と雇われた山役のみによる親族内の小規模な葬礼となっている。また，喪服が着用されるのも，前者の期間であり，草墳の解体から成墳に集まる親族の服装は日常のものとそれほど変わる所がなく，事例によっては頭巾を被っているが，それ以外の服装は日常

の服装である。

草墳葬と凶祭　ここで，問題となるのは，葬礼後の服喪期間の凶祭を如何に行っているかである。古家氏が観察した2001年５月の事例では，草墳解体後のチェサに用いられた死者を表す祭祀具のうち，遺影は家に残され，銘簾と魂帛箱子の墳墓への埋納以降は，紙榜のみが家に持ち帰られている。これは先に述べた如く，本来，紙榜は成墳祭の後，その場で作られたものである事にも対応すると考えられる。その後，持ち帰った紙榜と遺影とを死者の表象として用い，凶祭を行うものと思われる。

しかし，報告者による聞き書きや，４章で紹介したＣ家の事例では，草墳に遺体が安置されている期間に，自宅で遺影，魂帛箱子，紙榜を死者を表象するものとして小祥・大祥からなる凶祭を並行して行った[25]。この場合，草墳を解体して成墳祭を行う時点では，既に凶祭の期間は終わっている事になる。実際Ｃ家では，成墳祭を終えた当日，喪房の壁に掛けられていた遺影と紙榜も納められた魂帛箱子を降ろし，魂帛箱子は庭で焼却された。以降の先祖祭で紙榜が必要な場合は，その時々に風水師に依頼して作って貰うのだとの説明を受けた。この事例では，草墳に遺体が納められている期間が，既に凶祭を行う期間と重複しており，かつ，Ｃ家の事例では墓地改葬と合わせて，草墳に遺体を置く期間自体が約１年11ヶ月に短縮されていた。遺体は完全には乾燥していない可能性もあるが，この事例では草墳の解体後，棺桶自体を開かない，洗骨も行わない安葬が選択されており，遺体の状態も確認されていない。

草墳葬と穢土　一般的には，草墳葬を行う目的の一つとしてあげられるのは遺体の骨化であろうが，現在の青山島では，報告の冒頭に述べた如く，骨化を完全なものとする移葬時の遺族に手による洗骨儀礼が行われない例がみられる。60～70代の話者が記憶する限り，50年程前にも洗骨を伴わない草墳葬は行われていたという。これを「珍島の草墳との違い」と説明する話者もおり，島民自身もこのやり方が青山島独特のものであるとの意識を現在は有していると言える。青山島の一部の人々にとって，草墳葬を，珍島など島外の草墳葬の事例と対照する事により，安葬など，島民が独自と考えるありかたを説明する傾向にある。

安葬を行うに際しては，土地之神に対して，風水師がその旨を申し述べる。遺体の完全な骨化は，草墳葬に付した遺体の埋葬後にずれ込む。草墳の解体以降の過程は，遺体の確認と石灰土の棺への充填を行う場合もあるが，通常の土葬と共通する。安葬が選択された場合，死者の骨を遺族が手に取り，処理するのは，草墳の移葬の時点ではなく，墓地改葬の時点となる。この際には，Ｃ家の事例に示される如く，掘上げた遺骨を七星板の上で再び人体の形に再構成する事に留意が払われ，その形を崩さぬよう再埋葬される。

また，今日の青山島において，草墳葬を選択するに際しては，遺骨の浄化に伴う霊魂の浄化と，それに呼応した子孫の家運の興隆を求める意識もあると思われる。しかし，同時に，大きな理由とされるのが土中に「生のまま」埋められた遺体が腐敗し，先祖が眠る明堂の土地を汚してしま

うとする穢土に対する意識の存在であると考えられる（朴　2001）。この点について今回の調査では，複数の話者から，特に遺体から出る水が土地を穢すという説明が聞かれ，あるいは，遺体から水を抜き乾燥させるのが目的なので草墳葬を風葬（풍장）というとの説明も聞かれた。そこでは，腐敗する遺体のみが問題とされるのではなく，遺体から出る汚れた水が土中に染み出し，より高位の先祖を祀る明堂の土中に広がる事を忌避する意識を見出し得る。同時にそこには，墓の土地を支配する山神や土地之神への意識も併存していると言える。遺体を洗骨しない安葬で良しとする考え方を，この意識に照らすならば，洗骨は行わずとも草墳で遺体を乾燥させる事ができれば，生葬の場合のように土中で遺体が腐敗し，汚れた水が広がる事もなく，速やかに骨化するものと考えられ，土地を穢す事はないと島では受け止められているものと思われる。

すなわち，「洗骨改葬」としての草墳葬から「洗骨」の部分が省略されていても，草墳を構築して，そこに一定期間遺体を納め，乾燥した状態に処置する事は，現在の島民にとっては，一定の意味を有している事になる。

洗霊祭について　また，葬礼の過程において，現在の青山島では，草墳からの移送・本埋葬の過程における死者霊魂の浄化儀礼である洗霊祭は，必ずしも行われていない。洗霊祭は，家族から占い師に対して依頼があった際に，臨終後二日目に行われる場合もあるが，近年では，その例は少ないという。むしろ，洗霊祭は，ある家に家族員の病気など危機的状況が生じた際に，占い師により，家族に怨恨を持つ死者霊が災いを成していると判断された際の，怨恨を解くクッの一環として行われる傾向にある（徳丸2006）。いわば，洗霊祭が必要とされる事態が生じた時にのみ，それを選択的に行っている事になる。

しかし，現在では活発に活動しているムダンはこの島にはおらず，鬼神祭祀に関わっていた占い師も数年前に逝去した[26]。また，A氏の葬礼では，喪庁の霊座において死者の遺影を生米の入った器[27]の中に立てていたが，参列者や遺族にその理由を確認すると，「娘を沢山持って苦労しながら育て上げて死んだ父親であるから」との回答が得られた。これも霊魂を浄化するクッである洗霊祭と関わる遺影安置の方法である可能性がある。

小活　以上を纏めるならば，青山島の現在の草墳葬において，草墳構築から破墓に至る過程は，並行して喪房が喪家に設けられ凶祭が行われる事からも，八木が指摘する如く「葬」と「殯」の二重の意味を有する可能性がある（八木1995）。ただし，遺族の脱服は草墳が構築された時点，あるいは生葬の場合には，A氏の葬礼の如く墳墓の構築が終わった時点で喪服を脱ぐなどの行為によって示され，これを忌み明けである除喪をこの時点で一旦行っている事になる。これについては，先に述べたとうり，青山島では，ソウルなど都市部で働く遺族が葬礼に参加する場合，葬礼の終了後，直ちに帰る事ができるように脱服を早めたものとの説明が聞かれた。服喪の観念自体はかなり薄くなり，形式的なものになっている。それに影響を受け，草墳期間と凶祭を行う期間を重ねた可能性も考えられる。

また，洗骨儀礼が行われない事により，草墳の解体から成墳に至る過程は，凶祭が既に行われた事を除いて草墳を伴わない葬礼のそれとあまり変わる所がない。先にも述べたが青山島の草墳葬を支える一つの要因は，先祖が眠る明堂を遺体から腐敗の過程で染み出す水で穢さぬようにするためであり，遺体から出る汚水による穢土の意識が今日における草墳葬の維持に深く関わっているものと思われる。この場合，草墳解体後，棺桶を開けて，骨を取り出し，洗骨を行わずとも，草墳葬に附す意味はある事になる。土葬による遺体処理の過程で，避けては通れない遺体が腐敗し，その汚水が先祖が眠る土地に広がるというイメージを，草墳葬を組み込む事で取り除いているものと思われる。ただし，草墳葬に伴う遺骨の浄化に対する意識も全くみられない訳ではなく，その意識は，草墳葬を行うと埋葬後，土中にある骨が綺麗になる，あるいはそれによって子孫の家運が栄えるとする理解に示されている。

現代の青山島では，草墳葬に必ずしも洗骨が必要とされない事で，遺族は骨化が不十分な遺体に触れたり，遺体を目の当たりにする事がない。遺体の棺を開く事は残酷だと語る者もいるほどである。先に述べた第2章の草墳解体の事例では，棺桶を開き，遺体の状況を確認しているK風水師に，遺族の一人が遺体を見たくないので早く埋葬するように促したところ，風水師に強く叱責される場面もみられた。死後数年を経た遺体を直視し，臭気を嗅ぎ，その手に触れざるを得ない洗骨が必ずしも必要とされず，その役割を遺族が負う義務がない状況が，草墳葬を現在でも選択しやすい状況を生み出し，今日においても草墳が新たに作られる理由の一つとなっていると思われる。実際に，2006年9月の調査においても新たに作られた草墳が2基みられた（目次頁の草墳）。

また，これは今後の検証が必要であるが，青山島でも珍島などと同様に洗骨を伴う草墳葬がかつて行われていたとするならば，その遺骨の処理過程は，現在の改葬時における七星板上での骨の再配置の方法などに影響を与えているのではないかとも考えられる[28]。

おわりに

以上，2001年度から2006年度にかけて実施した調査資料に基づき，青山島の葬墓制についての報告と基礎的考察とを試みた。短期の現地滞在に基づく基礎的考察であるが，今後の調査により，検証と分析の深化を計りたい。また，調査に際しては，K風水師が用いている祝文や暦，風水に関する手書きの覚え書きの記録，K風水師一族の明堂での墓祭の記録も行い得た。その報告と分析は，また後日行いたい。

なお，調査に際しては，中央大學校教授朴銓烈博士とソウル国立民俗博物館教授鄭鐘秀博士，および当時の中央大学助手鄭・朴両氏，琉球大学研究員神谷智昭氏の大きな助力を得た。さらには，調査にご協力下さったA氏・B女史のご遺族，K風水師，C氏とそのご親族，各キリスト教

会関係者をはじめする青山島の皆様に心より感謝する。

註

1）青山島での調査は，平成12年度～15年度科学研究費補助金（基盤研究Ｂ「骨と位牌」研究代表者　筑波大学　古家信平教授）に基づく2001年７月の巡検を手始めとして，2002年から2003年にかけて４度行った。引き続き，平成16年度～19年度科学研究費補助金（基盤研究Ｂ「遺体処理と祭祀に関する比較民俗学的研究」研究代表者　筑波大学　古家信平教授）に基づき３度の調査を行った。本論は，同科研の報告を加筆・再編したものである。同島の調査では，同島の葬墓制と祖先祭祀，占い師による鬼神の祭祀，キリスト教の受容による島の信仰的世界の変容などについて調査を実施した。また，滞在中に７度の葬礼が行われ，その内，2002年９月４日，同年12月３日，2003年９月１日の葬礼については，観察記録を作成する機会を得，特に2002年12月の葬礼では，草墳の作成過程のビデオとカメラによる映像記録を作成する機会を得た。さらに，2006年９月２日と３日に二日に渉って行われた墓地改葬と草墳の解体，移葬についても同様に映像記録の作成を行った。

2）巨文島への日本人移民の生活史，ならびにそこで語られた伝承については，「巨文島生活記」（『山口県史　民俗編』山口県　2010年）ほかで論じた。

3）2003年度青山面事務所作製資料に基づく。

4）植民統治時代，青山島には80人ほどの日本人が生活していたという。Ａ里の小学校には，日本人教師が赴任し，日本式神社も建立された。赴任した日本人教師の良い人柄についての記憶を老人達は保持しており，聞き書きの過程で時折それを語った。

5）1650年建立。莞寺末寺。白蓮寺は，尼僧と僧侶とが修行する修行寺であり，島の女性達は子供の幸福を祈願して燃燈（연등）を納めているが，葬礼については関与はみられない。但し，死者霊の祟りであるとされた相談に対して，その祟りを解消するための祈祷などは行っている。

6）지부자。教会活動を積極的に支える牧師任命のボランティア

7）青山教会の牧師によれば青山島の信者数は250名ほどとの事だが，最も人口が多いＡ里で活動を行っている同教会の早朝礼拝への参加者は牧師と15名の児童からなる聖歌隊，オルガン奏者を除いて36名（女性25名，男性11名，内児童が18名，他は高齢者がほとんど），農村部の中央教会収穫感謝祭への参加者は，牧師とオルガン奏者を除いて，19名（女性12名，男性７名，内児童が11名，高齢者８名）であり，家族全員で礼拝に参加している家は少ない状況である。教会では日曜学校など児童への教育や，独居老人の世話などの福祉活動に力を入れている。その関係から児童の礼拝への参加や老人の信者が礼拝に参加する傾向があり，青壮年層の信者や家単位の入信者は限定的である。教会では，入信者がキリスト教式の葬礼を選

択し，祖上壺の祭祀を中止し「追悼礼拝」により死者霊の祭祀を行う例が認められた。青山教会の牧師によれば，キリスト教信者が死亡した場合には，臨終の時点で家族が葬儀をキリスト教式で行うか，儒教式で行うかを話し合って決め，キリスト教式で行う場合は，臨終礼拝や出棺は家族と集まった信者が中心となって進め，下棺礼拝（埋葬）にはキリスト教の信者ではない親族も集まるという。棺桶を担ぐのは信者以外でも構わないが「観音菩薩」の掛け声は行わず，讃美歌で死者を賛美する。信者遺族の希望で遺体を草墳葬に附した例もある。また，信者遺族が火葬を希望し，莞島の火葬場で遺体を火葬し，火葬骨を島に納骨した例も聞かれた。島のキリスト教会の活動や，信者の信仰については，別項にて報告する。

8）青山島の「占い師」とその鬼神観，家庭での祖上壺の祭祀，死後結婚などについては，徳丸亞木「鬼神と占い師―韓国全羅南道莞島郡青山面青山島の占い師とその鬼神観―」（民俗文化研究会，『民俗文化研究』7号，2006年）で報告した。

9）あくまで現認できた数であり，実数はこれよりもかなり多いものと推定される

10）葬礼の方法や規模の選択は，死者遺族の経済的状況や既婚か未婚かなどにも左右される。例えば，独身の死者の場合は，占い師により葬礼の過程で死後結婚が行われる場合もあった（徳丸2006）が，財産を持たない者の場合は，女性が洗濯に用いる洗濯棒を棺桶に収めてそれに変える事もあったという。

11）一つの円墳に夫婦を埋葬する方法。この場合，夫を左側，妻を右側に埋葬する。

12）ただし，他家の所有地を借りたり購入して墓地にする例は確認できず，原則的に自家の所有地が墓地に用いられるようである。

13）ただし，墳墓前の祭壇を支える礎石の置き方について実際に作業を行っている者達との間で意見の食い違いが見られた。礎石の後方を開けるかどうかについて，蛇が入り込むので土で塞ぐようにと言うＴ風水師の意見に対して，作業者からは今までは開けて作って来たとする反論が成されるなど，口論と意見の調整が見られた。

14）親は墓地へは行かず親戚が埋葬するとする話者もいる。

15）同様の埋葬法はハシカで死んだ者の埋葬法としても聞かれた。

16）死者の孫の内，できるだけ若い女性が良いとされる。

17）頭上運搬が行われていた地域であり，霊輿も頭上に献げて運ぶ事もあるという。

18）第２章のＢ女史の葬礼では，実際に半分に切った瓢箪を割っていた。

19）別の話者によれば，先祖がかつて住んでいた家に死者の魂が立ち寄って挨拶をするのだという。先祖祭がその家で現在も行われている場合であるのか，居住の経験がある場合でもその様にするのかは確認できなかった。ただし，青山島の占い師によれば，その家に祖上壺を祀るのは，その夫婦が新たに屋敷を購入した場合という事であるので，屋敷地に対する観念と先祖の祭祀とが結び付いている可能性も考えられる。

20) 2003年９月１日の葬日では37才と61才の者が該当した。

21) 通常は，埋葬地が平らにされた状態で行う儀礼。

22) 占い師への聞き書きによれば，鬼神には様々な種類があるとされるが，この場合は死者霊を指す。青山島の鬼神については，徳丸2006で報告した。

23) この時点では五色の糸を編んだチョンスゥンケビは箱の中に確認できなかった。

24) 鄭（2003）や西村（1985）の研究を参考にするならば，青山島においても元々生葬のみの葬礼に草墳葬が受容されたものとは考えにくい。現況からは生葬と草墳葬は併存する状況であるが，現在の集落に繋がる人々の居住開始の段階において草墳葬のみが非選択的に行われていたかどうかについては現段階では検証が困難である。生葬が何時から行われていたかについては，聞き書きでは明確には確認できなかったが，Ｃ家を例にとると，1965年に死亡したＣ氏の父と2004年に死亡したＣ氏の妻は草墳葬であるが，90年前に死亡したとされる祖父については草墳葬であったと伝えられていない。また，1989年に死亡したＣ氏の母親，1976，1987年にそれぞれ死亡した二人の弟も生葬である。祖父の葬礼に実際に関わった者は既にいないため，伝承通り生葬であったのかは確認できないが，30年ほど前に行われた弟の葬礼については，その葬礼に関わったＣ氏は生葬であったとしており，少なくとも当時から草墳葬を伴わない葬礼が行われていたものと思われる。

25) 本来は朝と夜に供物を捧げ（上食，상식），哭（곡）を行うものとされるが，礼日に祭祀を行うのみに簡略化されている。

26) 占い師が存命当時から風水師が葬礼のほとんどを指示している点を考えると，かつては，島に５名いたとされるムダンが関与する洗霊祭が葬礼の過程で行われていたのではないかと思われるが，聞き書きでは確認できていない。

27) 別の話者によれば，以前は砂を川の水で綺麗に洗ったものを用いたという。

28) 改葬では，土中から掘り出した遺骨から泥を払うが，これが洗骨（식골）であるとする話者もいた。

参考文献

李光奎　1969　「草島의草墳」『民族文化研究』３　高麗大学校民族文化研究所

徳丸亞木　2006　「鬼神と占い師―韓国全羅南道莞島郡青山面青山島の占い師とその鬼神観―」民俗文化研究会　『民俗文化研究』７号

西村美恵子　1985　「韓国の草墳をめぐる民俗」『日本民俗学』161

八木透　1995　「日本の改葬習俗と韓国の草墳」『アジアのなかの日本』仏教大学総合研究所紀要　第２号別冊

朴銓烈　2001　「草墳にあらわれたる祖先霊認識のありかた」『心意と信仰の民俗』吉川弘

文館
鄭鐘秀　2003　「韓国의草墳」国立民俗博物館
依田千百子　1980　「朝鮮の葬制と他界観」『国分直一博士古希記念論集　歴史・民俗編』新日本教育図書
全南莞島郡青山面郷土史発刊委員会編　2001　『青山島』